



0 あなたの中にいる君へ

子どもたちには、とても申し訳ないと思っている。この本はどうしても子ども向けには書くことができなかった。今、この本を手をしているあなたは、いくらか“大人”であり、“ひとり”として存在している。この本をどのように解釈できるかどうかは、知識と経験と心のあり方によるところが大きいだろう。きっとあなたの周りには、忙しく毎日という時間が過ぎているだろう。時々、あなたは不安を抱え、時々、安堵の息を漏らしているのだろう…。かつて子どもの頃には感じ得なかったものに苛まれているのだろう…。

この本を読むためには、理解しようとか感じようとしても無駄である。想像するしかないのである。あなたがかつて子どもの頃、夢見たように、論理的な創造ではなく、想像的な空想をしなければならないのである。

君に読み解かれることを祈っている。わたしはいくらか君に挑戦的にこの本を捧げたいと思う。君には純粋さがあり、その純粋さに私はこの本を投げ入れることとする。

私は君に問う。「純粋」とは何か。

あなたがあれこれと考えずに想像し続けたならば、もう一度、あなたは逢いたい人と対話することができるだろう。その人が目に見える場所にいなくても……。

1. 丸呑みにしたボア

僕がまだ6歳のとき、読んだ本の中にすばらしい絵が描いてあった。その本の名前は『ほんとうにあった話』というタイトルで、原始のジャングルについて書かれていた本だった。

その本には、ボアという大蛇がケモノを丸呑みしようとするところが描かれていたんだ。この43歳になって、思い出して描くと、だいたいこういう絵だったと思う。



「ボアは、獲物を噛まずに丸呑みします。そのあとはじっとして、6か月かけて、お腹の中でこなします」とその本には書かれていた。

そこで僕は、ジャングルではこんなことも起こるんじゃないかとワクワクして、いろいろ想像してみたんだ。そして色鉛筆で、僕なりの絵を初めて描いたんだ。

僕の描いた一番目の絵。それはこんな感じ。



僕はこの絵を大人たちに見せて、「怖いでしょ!」と聞いてまわった。でも大人のみんなは、「どうして、帽子が怖いんだい?」って言うんだ。君も変だと思うでしょ?

僕が描いたこの絵は、帽子なんかじゃないんだ。ボアがゾウをお腹の中でこなしている絵なんだ。だから、僕はボアの中身を描いて、大人たちにもうまくわかるようにしてあげた。大人たちは、いつも細かく説明をしてあげないと、ちっともだめなんだ。

だから、こんな風に描いてみた。



この絵を見せた大人たちは、「ボアのお腹の中が見えても見えなくてもどうでもいい」って言うんだ。大人っていつもワケのわからないことを言うんだ。そして大人たちは僕に「変な絵を描くことなんてやめて、地理や歴史、算数や国語の勉強をきなさい」と叱られた。

だから、僕は6歳で絵描きになる夢をあきらめたんだ。一番目の絵も二番目の絵もだめだったからね。すっかり自信をなくして、めげてしまったんだ。大人たちは知らず知らずの内に摘み取っているんだ。小さなかわいい可能性という芽をね。大人たちは自分では、全く何もわからない。だから子供はくたびれてしまう。くたびれた子供は、将来そういう大人たちの仲間入りをしていく。大人たちは、いつも答えをはっきりさせないと、わかろうとしないんだ。

それで僕は別の仕事を選んで、飛行機の操縦を覚えたんだ。そして世界中を飛びまわった。大人たちにも多少なりとも感謝はしている。地理の勉強をしていて、ほんとうに役に立ったんだからね。一目で中国なのか、アメリカのアリゾナ州なのかがわかるから、真っ暗闇の空を飛んで迷っても、何度も助かった。

僕は、この43歳まで常識的に生きてきて、常識的な大人たちともたくさん出会ってきた。大人たちの中で暮らしてきたんだ。だから常識的な大人たちを近くで見てきた。でも、だからと言って、それで何かいいことがわかったわけでもなかった。

賢そうな人を見つけると、僕はいつも、僕の一番目の絵を見せてみることにしていた。その人が本当のことがわかる人なのかどうかを知りたかった。でも返ってくる答えは、決まって「帽子だね」という乏しい言葉だった。そういう人には、ボアのことや原始のジャングルのことも、星のことも一切しゃべらなかつた。賢そうな相手に合わせて、トランプ（経営学）やゴルフ（スポーツ）、政治やネクタイ（時計や服）のことをしゃべっていた。すると大人たちは、「あなたのように物事の分別がはっきりわかっている人とお近づきになれて光栄です」ととても嬉しそうに喜んでた。

2. ねえ、ヒツジの絵を描いて

そんなわけで、僕はずっと独りぼっちだった。いや、本当の意味で独りぼっちだったと言った方が正しいかもしれない。ただ自分の心を誰にも開けられないまま、今から6年前、何かがちよっとおかしくなって、砂漠の真ん中に落ちてしまった。

僕の飛行機のエンジンの中で、何か壊れていたんだ。僕には、見てくれるひとも、同乗者もいなかったから、うまくなおせるかわからなかったけど、全部ひとりでなんとかやってみることにしたんだ。それで僕の生死、未来が決まってしまうから。その時、僕が持っていた飲み水は、たった7日分しかなかった。

1日目の夜、僕は砂の上で眠っていた。その場所は、人の住んでいるところからは、遥か遠くに離れていた。海のど真ん中、いかだで彷徨っている人よりも、ずっと独りぼっちだったと思う。だから、そのあと僕がびっくりしたのも、みんなわかってくれると思う。日が昇るころ、僕は、不思議なかわいらしい声で起こされたのだから。

「ねえ、ヒツジの絵を描いて！」と耳元で声がした。

「えっ？」と僕が目まん丸くしていると、

「ねえ、ぼくにヒツジの絵を描いて」とその男の子は、僕にお願いしていた。

まるで雷にでも打たれたみたいに、僕は飛び起きた。何度も目をこすって、しっかり目の前を見る。すると、そこには不思議な男の子が一人、何か思いつめた様子で、僕のことをじっと見つめている。あとになって、この男の子の姿を、思い出せる限り絵に描いてみた。でもきっと僕の絵は、実際の魅力にはかなわない。ここで断っておくけど、僕が悪いんじゃない。六歳の時、大人たちのせいで絵描きになる夢をあきらめちゃったから、それからずっと絵を描いたことがなかったんだ。中の見えないボアの絵と、中の見えるボアの絵を描いたつきりね。



それはともかく、いきなり男の子が出てきて、僕は目をまるくした。その場所は、人の住んでいるところから遥か遠くに位置していたんだから。でも、男の子は、道に迷ったようでも、疲れたようでも、お腹が空いているようでも、喉が乾いているようでも、何かに恐怖しているようでも見えなかった。人の住んでいるところから遥か彼方、砂漠の真ん中で、迷子になっている。そんな感じは、男の子にはどこにもなかった。

やっとのことで、僕はその男の子に声をかけることができた。

「キミは、ここで何をしているの？」

すると、男の子は、僕の質問には答えず、もう一度、

「ねえ、ヒツジの絵をかいて」と僕にお願いしてきた。

ものすごく不思議だけど、だからやってしまうことがある。なんだかよくわからないけど、人の住んでいるところから遥か彼方で死ぬかもしれないのに、僕はポケットの中から紙とペンを取り出した。でも、僕は地理や歴史、算数や国語ぐらいしか習っていないので、僕はその男の子に（ちょっとしょんぼりしながら）「絵を習ったことがないんだ」と言うと、男の子はこう答えた。

「大丈夫。ヒツジの絵を描いて。」

ヒツジの絵なんて一度も描いたことがなかったから、僕は、僕の描ける二つの絵のうち、一つ

を男の子に描いて見せた。中の見えないボアの絵だった。その後、男の子の言葉を聞いて、僕は本当にびっくりした。

「違うよ！ゾウをお腹の中で消化しているボアなんて欲しくない。ボアはとっても危ないんだ。ゾウなんて大き過ぎて邪魔だよ。僕んち、すごく小さいんだ。だからヒツジが欲しいんだ。ねえヒツジを描いて」

僕は、男の子の答えにびっくりしながら、ヒツジを描いてみた。



初めて描いた羊の絵を僕が差し出すと、その男の子は絵をじっと見つめて一言。

「こんなヒツジ欲しくない！このヒツジ、もう病気なんかじゃないの。もう一度、描いてよ」
僕はもう一度、ヒツジの絵を描いてみた。



男の子は、あきれたように笑った。

「見てよ。これも、ボクの欲しいヒツジじゃないよ。角のある荒っぽいヒツジなんかいらんよ。もう一度」

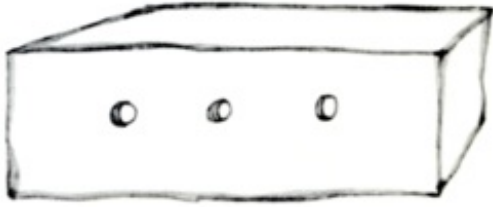
僕は、男に言われるまま、またヒツジの絵を描きなおした。



だけど、前と同じで、だめだと言われた。

「これ、ヨボヨボじゃないか。ボクが欲しいのは長生きする従順なヒツジなんだ。さあもう一度」

もう僕は我慢できなかった。僕は早く故障した飛行機のエンジンをバラバラにして、直さなきゃいけなかった。だから、ささっとこういう絵を適当に描いたんだ。



僕はぶっきらぼうに男の子に言った。

「ほら、王子さま。キミの欲しいヒツジはこの中にいるよ」

無理難題を投げかけてくるこの男の子のことを僕は皮肉を交えて『王子さま』と呼ぶことにしたんだ。

びっくりしたことに、この箱の絵を見て、王子さまは目をきらきら輝かせたんだ。

「うん、ボクはこういうヒツジが欲しかったんだよ。ありがとう。このヒツジ、草たくさんたべるかなあ？」

「どうして？」と僕が聞くと、

「だって、ぼくんち、とても小さいんだもん」と王子さまは答えた。

「きっと大丈夫だよ。キミにあげたのは、とても小さなヒツジだから」

王子さまは、顔を絵に近づけた。

「言われるほど、そんなに小さくないよ。あ！眠っちゃった」

僕は王子さまとこうして出会ったんだ。

3. 王子さまのおうち

王子さまがいったいどこから来たのか、聞いてもなかなか教えてくれなかった。王子さまは、たくさん僕に質問するのに、僕の質問には、ちっとも耳をかしてくれなかった。だから王子さまとの話の端々の言葉から、少しずつ思い描いて行くしかなかった。

たとえば、僕の飛行機を初めて目にしたとき（ちなみに僕の飛行機の絵は描かない、僕にはとても難しすぎるからね）、王子さまは僕にこう聞いてきたんだ。

「この置き物、何？」

「これは置き物じゃない。飛行機だよ。空を飛ぶんだ。僕の飛行機なんだよ。」

「僕は空を飛べるんだ」とかなり得意気に王子さまに言った。

すると、王子さまは大きな声で

「えっ！君も、空から落ちてきたんだ！」と言った。

「そうだよ。」と、僕はバツが悪そうに言った。

「あははっ、変なの……！」

王子さまがあまりにけらけらと笑うので、僕はほんとうに腹が立ってきた。とても不幸な目にあっているんだから、まじめに取り合っほしかったんだ。

それから、王子さまはこう続けた。

「ということは、君も空から来たんだね！どこの星から来たの？」

そのとき、王子さまの秘密に触れたような気がして、僕はとっさに聞き返した。

「それって、キミはどこか別の星から来たってこと？」と僕は続けて質問した。

しかし、王子さまは答えてくれませんでした。

僕の飛行機を見ながら、そっと首を横にかしげた。

「うーん、これだと、あんまり遠くからは来れないね」

王子さまは、しばらく一人で、あれこれと考えていたようだった。そのあとポケットから僕の描いたヒツジの絵を取り出して、宝物でもじっと見つめるように眺めていた。

みんなも一緒だと思うけど、王子さまが口にした別の星のことが、僕はすごく気になっていたんだ。だからもっとくわしく知ろうと思った。

「キミはどこから来たの？キミの家ってどこ？僕の描いたヒツジをどこに連れて行くの？」

王子さまは答えに詰まって、僕にこう言った。

「よかった、君が箱をくれて。夜、ヒツジの家代わりになるね。」

「そうだね。かわいがるんなら、昼間、つないでおくためのロープもあげるよ。それと、長い棒も」

でもこの提案は、王子さまのお気にめさなかったようだった。

「つないでおくだって！そんなの、とんでもなくおかしい考えだよ！」すごい剣幕で王子さまは、僕を正面から見つめた

「だけど、つないでおかないと、どこかに行っちゃって、いなくなっちゃうよ」とおそろおそろ僕は言った。

すると王子さまは、また笑いだした。そして笑いながら
「ヒツジがどこへ行くっていうんだい！」と言った。
「どこへでも行くさ。どんどん前に進んでいってしまう」と僕が言うと、
王子さまは、思いつめた様子で、こう言った。
「大丈夫、ものすごく小さいんだ、ボクんち」
それから、ちょっとさみしそうに、こう言いました。
「真っ直ぐ前に進もうとしても、あんまり遠くへは行けないんだ。それくらい小さいんだよ」

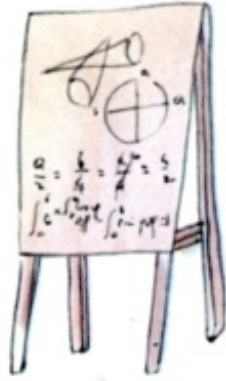


4. 小惑星B612

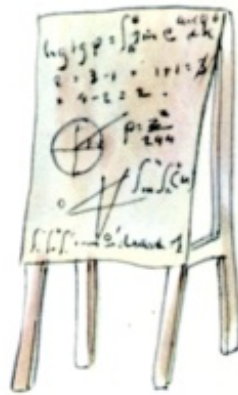
なんと、王子さまの星は、一軒の家よりちょっと大きいぐらいの大きさだった。不思議と僕はあまりびっくりしなかった。地球や木星や火星、金星みたいに名前のある大きな惑星のほかに、望遠鏡でもなかなか見つけられない小さな星が、宇宙には、たくさんあることを知っていたからだ。そういった星が天文学者に見つかり、番号で呼ばれることになる。〈小惑星325〉といった感じに。



おそらく王子さまの星は、小惑星B612だと、僕は思うんだ。それにはちゃんとしたわけがある。その星は1909年に、望遠鏡をのぞいていたトルコの天文学者が、一度だけ見つけたことがある星だった。そのトルコの天文学者は、全世界天文学者会議で、その星を見つけたことをきちんと発表したんだけど、身につけている民族衣装のせいで、世界の権威ある学者たちには、まったく信じてもらえなかったんだ。大人たちというのは、いつもこんな風。



でも、小惑星B612は運がよくて、そのとき政権を握ったトルコの一番偉い人が、みんなに西洋風のきちんとした服を着ないと死刑だぞという法律を出した。1924年にその天文学者は、上品な西洋風の服を着て、発表をやりなおした。すると今度は、世界の権威ある学者たちの誰もが認めた。



こうして、小惑星B612のことをいちいち言ったり、番号の話をしったりするのは、大人たちのためなんだ。大人たちは、数字が大好きだからね。大人たちに、新しい友達ができたといいても、中身のあることは、何一つ聞いてこないだろう？

つまり「王子さまの声ってどんな声？好きな遊びはなんなの？蝶は集めてる？」とは聞かずに、「王子さまはいくつ？何人兄弟？体重は？お父さんは年収はどれだけ？」とか聞いてくる。

大人たちは、数字を聞いただけで、わかったつもりになるんだ。大人たちに「すごい家を見たよ、バラ色のレンガでね、窓のそばにゼラニウムがあってね、屋根の上にもハトがたくさんいるんだよ」と言ったところで、大人たちは、全くその家のことを思い描けないんだ。こう言わないと大人たちは、ちっともわかってくれない。「10万フランの家を見ました。」すると大人たちは「おお素晴らしい！」と言う。「変でしょ」

だから、僕が大人たちに、あのとき王子さまがいたって説明する時には「王子さまには、普通の男の子にない魅力があって、けらけらと笑って、ヒツジを僕におねだりして・・・だから、王子さまがいたって言いきれないじゃないか」と言っても、「何言ってるの」と大人たちに子供扱い

されてしまう。だから「王子さまの星は、小惑星B612だ」と言いきる。そう言うと大人たちは納得して、文句の一つも言わないんだ。大人ってこういうものなんだ。恨んじやいけないよ。大人たちに、子どもたちは、もっと広い心を持たなくちゃいけないんだ。

もちろん、子どもたちは人間がどう生きるかということ、どうということなのかよくわかっているから、番号や数字なんてどうだっていい。できるなら、僕はこの王子さまのお話を、おとぎ話風にはじめたかったんだ。「むかし、むかし、王子さまが、自分より少し大きいくらいの星に住んでいました。王子さまは友だちが欲しくて」人間がどう生きるということをよくわかっている人には、こっちのほうが、ずっともっともらしいと思う。でも、大人たちは「おとぎ話か・・・子どもの読み物だな」と、真剣に読んでくれないんだ。

というのも、僕はこの本を、あまり軽々しく誰にも読んでほしくないんだ。この王子さまとの思い出を話すのは、とても辛いから。6年前、あの王子さまは、僕の描いたヒツジと一緒にいなくなってしまったから。

ここに書こうと思ったのは、忘れたくないからだ。僕に忘れてほしくないからだ。友だちを忘れるのはつらい。いつでもどこでも誰でも、友達がいるわけではないということをみんな知っているからね。そして僕も、いつ、数字の大好きな大人になってしまうとも限らないからね。

だからそのためにも、僕は絵の具と鉛筆を久しぶりに手に取り、この歳でまた絵を描くことにしたんだ。最後に絵を描いたのは、中身の見えないボアと中身の見えるボアを描いた六歳のときだ。当たり前だけど、なるべくそっくりに、王子さまの姿を描きたいと思う。うまく描ける自信なんてない。一回くらい描けても、他は全然ダメかもしれない。背丈も少し違っていたり、王子さまがものすごく大きかったり、ものすごく小さかったり。服の色も迷ってしまう。

「君もキミの王子さまを描いてみるといいよ」

そうやってあれやこれや、うまくいったりいかなかったりしながら、がんばったんだ。もっと大事な、細かいところも間違ってると思う。でもできれば大目に見て欲しい。僕の友達の王子さまは、ひと言もはっきりしたことを言わなかったんだ。王子さまは僕を、似た者同士だと思っていたのかもしれない。でもあいにく、僕は箱の中にヒツジを見ることはできなかったし…もしかすると、僕もちょっと大人なのかもしれない。きっと歳をとったんだと思う。

5. バオバブの種

少しずつわかってきたんだ。王子さまの星がどんな星で、なぜそこを旅立つことになったのか。そして、どんな旅をしてきたのか。ほんとうに少しずつだったが、少しずつわかってきたんだ。

そんなふうにして、3日目、僕はバオバブの恐ろしい話を王子さまから聞くことになった。この話も僕の描いたヒツジの絵がきっかけだった。王子さまは深い悩みでもあるみたいに、ふいに僕に聞いてきたんだ。

「ねえ、ヒツジが小さな木を食べるっていうのは、本当？」

「ああ、本当だよ」と僕は答えた。

「それは、よかった！」と王子さまはうれしそうに顔をあげた。

ヒツジが小さな木を食べるってことが、どうしてそんなに大事なのか、その時の僕にはわからなかった。

「ということは、バオバブも食べるかなあ？」

僕は、笑いながら王子さまに教えてあげた。

「バオバブっていうのは小さな木じゃなくて、人々たちに何もかも信じ込ませる権力を持った教会ぐらい大きな木で、そこにゾウの群れを連れてきたって、たった1本のバオバブも食べきれやしないよ」



ゾウの群れという言葉も、王子さまはよほど面白がっていたようだった。

「ゾウの群れだって！ボクの星に来たら、ゾウの上に、またゾウを乗せなきゃいけないね」と楽しそうに言った。それからすぐに真剣な眼をして僕を見つめた。

「バオバブといたって大きくなる前、最初は小さいはずよね」

「そういえばそうだね、キミの言うとおりの！でも、どうしてヒツジに小さなバオバブの芽を食べたいんだい？」

「え！わかんないの！」

そんなこと当たり前だ！と言わんばかりだった。僕は一人でずいぶん頭をひねったけど、どうい

うことなのか僕なりに考えてみたが見当もつかなかった。

王子さまにどういうことなのか聞いてみると、王子さまの星には、他の星もみんなそうだけど、善い草と悪い草がある。善い草の生える善いタネと、悪い草の生える悪いタネがあるわけだ。でもタネは目に見えない。土の中でひっそり眠っているね。起きてもいいかなって頃合いになると、まずお日様にむかって、無邪気でかわいい芽を出していくんだ。赤カブやバラの芽なら、そのままにしておけばいい。でも悪い草や悪い花になると、見つけ次第すぐ取り除いてしまわなければいけない。そして、王子さまの星には、怖ろしいタネがあったんだ。それがバオバブのタネだった。たった一本のバオバブでも、手遅れになると、もうどうやっても取り除けなくなってしまう。星中に広がって、根を張って星に穴をあけてしまう。それで、もしその星が王子さまの星のように小さくて、びっしりバオバブだらけになってしまえば、星は爆発してしまうということだった。



「要は、真面目にしているかどうかなんだよ」

「朝、自分の支度が終わったら、星の支度も丁寧にすること。小さい芽のうちは、まぎらわしいけど、バオバブの芽とわかったら、こまめに取り除くように毎日頑張らないといけない。手間がかかるのは、面倒といえば面倒だけど、簡単といえばとても簡単なことんだ」

王子さまは僕に、この星の子どもたちがずっと忘れないような立派な絵を描いてみないかと、僕に持ちかけてきたんだ。

王子さまは、「いつか子供たちが旅に出たとき、役に立つよ。今やらなきやいけないことを、

先にのぼしのぼしにしてると、ときどき具合の悪いことになる。それがバオバブだったら、とてもひどいことになる。こんな星があったんだ、そこには怠け者が住んでいて、小さなバオバブの木を3本放っておいたばかりに大変なことになってしまったんだよ。」

というわけで、僕は王子さまに言われるがまま、怠け者の星の絵を描いた。偉そうに言うのは嫌いなんだけど、バオバブが恐いってことは全然知られていない。この地球で、そういうことを甘く考えていると、とても大変なことになる。だから、思い切って言うことにする。

「子供たち、バオバブには気をつけること！」これは、僕の友だちのためでもある。その人たちはずっと以前から、すぐそばに危険があることに気が付いてなかったんだ。だから僕は、ここにこの絵を描こうと思う。人々が血と涙を流して争うような再び大きな過ちを起こさないために。ここに戒めるだけの価値があるから。そう、みんなはこんなことを不思議に思うかもしれないね。「どうしてこの本には、こういう大きくてりっぱな絵が、バオバブの絵だけなんですか？」と。答えはとっても簡単。やってみたけど、うまくいかなかったんだ。バオバブを描いたときは、一刻も早く危険を知らせなければと、一生懸命だったんだ。



6. 王子さまと44回の夕暮れ

こうして、少しずつわかってきたんだ。王子さまがさみしく、ささやかに今まで生きてきたってことが。ずっと王子さまには、穏やかな夕暮れしか、癒してくれるものが側になかったんだ。たくさんのものが通り過ぎて去って行ってしまったから。

そのことを初めて知ったのは、4日目の朝のことでした。そのとき、王子さまが僕にこう言った。

「ボク、夕暮れが大好きなんだ。夕暮れを見にいこうよ」

「でも、待たなきゃ」と僕は答えた。

「待つって、何を待つのか？」と王子さまはきょとんとした表情をしていた。

「夕暮れを待つんだよ」と僕が答えると、王子さまは、とても驚いてから、王子さまは笑いながら

「てっきりまだ、ボクはボクの星にいるんだと思ってたよ！ボクの星は小さいからね」

僕には、王子さまがさびしそうに笑っているように思えた。

地球では、アメリカが真昼のときは、フランスでは夕暮れ。だからあつという間にフランスへ行けたら、フランスで大切な人と夕暮れが見られるってことになる。でも残念なことに、フランスはアメリカからとても遠い。けれど、王子さまの星では、少し緑色のイスを持って歩けば、それでいい。そうやって王子さまは、いつでも見たいときに、沈みゆく太陽を見ていたんだ。一人ぼっちで。

王子さまは「1日に、43回（44回）も夕暮れを見たことがあるよ」と言った少しあとに、こう言葉を付け加えた。「ねえ、わかってくれるかなあ？人はとても切なくなると、夕暮れが恋しくなるんだよ」

「44回も夕暮れを見た日のキミは、とてもとても切なかったんだね？」と僕は質問した。

王子さまは、うつむいたままそれ以上返事をしなかった。



7. 美しいバラにはトゲがある理由

5日目も、ヒツジのおかげで、王子さまのことが、またひとつわかったんだ。

王子さまは、何の前置きの話もなく、唐突に僕に聞いてきた。ずっと独りで、考えていたことについて。

「ヒツジが小さな木を食べるんだったら、花も食べるかなあ？」

「ヒツジは目に入ったものすべてを食べてしまうよ。」と僕が答えると、

「花にトゲがあっても？」と僕に何かを求めるような目をしながら聞いてきた。

「ああ。花にトゲがあっても食べてしまうよ」と僕は軽く答えると、

「じゃあ、花のトゲは一体“何のため”にあるの？」と王子さまは質問してきた。

僕には、わからなかったんだ…。その時の僕にはね。王子さまが何を言いたかったのか…。

僕は、壊れてしまったエンジンの堅くしまったボルトを外そうと、一生懸命だったんだ。しかも、手酷くやられたらしいということがわかってきていたし、飲み水がなくなる最悪の事態になるんじゃないかという心配で頭がいっぱいだった。



「ねえ、花のトゲは何のためにあるの？」

王子さまは、質問を一度したら、途中では絶対にあきらめなかった。僕は、強く締まったボルトでイライラしていたから、ろくに考えずに返事をした。

「花のトゲなんて、何の役にも立たないよ、たんに花が意地悪したいだけなんだろう。ただそれだけさ」

「えっ！」と王子さまは、キョトンとした。すると、少し黙りこんでから、王子さまは強い口調で僕につっかかってきた。

「ちがうよ！花は、か弱くて無邪気なだけなんだ。傷つきやすいから、どうにかして、安心したいだけなんだ。トゲがあるから、危ないんだぞって強がっているだけなんだ」

僕は、王子さまに何も言わなかった。この時、王子さまの話はそっちのけで、僕は故障したエンジンのボルトがどうにもしても動かないなら、いっそのこと、このハンマーでふっとばしてやると考えていたからだ。でも、王子さまは、また僕の考えの邪魔をした。

「君は、ほんとうにそんな風に思っているのかい！花というのはね…とても、とても、…」と歯を食いしばりながら王子さまが言うので、僕は、「違う！違うんだ！花のトゲのことなんか知らないよ！ただいいかげんに返事をしただけ。今僕には、ちゃんとやらなきゃいけない“大事なこと”があつて忙しいんだよ！」と今にも爆発しそうな王子さまに僕は弁解しようとした。

王子さまは、僕のとっさに出した言葉にあっけにとられていた。

「“大事なこと”って何！」

王子さまは僕を見つめた。指を機械油で黒く汚して、不格好な置き物の上にかがんでいる。そんな僕のことを。

「君も大人たちみたいな、しゃべり方をするんだね！がっかりだよ」

僕はちょっと恥ずかしくなった。でも、容赦なく王子さまの言葉が続く。

「君は間違っている。全部をまとめて、ひっくるめて考えようとしてるんだ！それが逆に複雑になっていることも知らずに！」

王子さまは、本気で怒っていた。そんな王子さまの黄金色の髪の毛が、砂漠の風になびいていた。僕は、怒っている王子さまを奇麗だと思ってしまった。そして、王子さまは話を続ける。

「いつも必死そうな赤ら顔をしている男のいる星があつたんだけど、その男は花の香りもかかないし、星も眺めない。誰かを好きになつたりすることもなくて、足し算のほかには、何もしたことがないんだ。1日中、君みたいに、繰り返すんだ。『私は、ちゃんとした人間だ！ちゃんとした人間なんだ！』って、それで、鼻を高くする。でもそんなの、人間じゃない、そんなの、キノコだ！」

「な、何？」と僕はキノコってどういうことだろうとポカンとした。

王子さまは、すっかりご立腹だった。

「花は何百万年も前から、トゲを持っている。何百万年も前から…。なのにヒツジはそんなトゲを持った花でも食べてしまう。だったらどうして、それをちゃんと理解しようとしちゃいけないわけ？なんで、何の役にも立たないトゲを、わざわざ苦労して自分のものにしたのかって。ヒツジと花の闘いなんて大事じゃないって言うのかい？太った赤ら顔のおじさんの足し算の方がちゃんとしてて、大事だって言うのかい？」

「この広い宇宙にたった一つしかない花、ボクだけの花が、ボクにはあつて、なのに、ヒツジが、自分のしていることもわからずに、朝、ふっとその花をパクツと食べちゃうことがあるってわかっていたとしても、それが、大事じゃないって言うのかい？」

王子さま顔をまっ赤にして、しゃべりつづける。

「誰かが、何百万という星の中に二つと存在しない、一輪の花を好きになつたんなら、その人はきっと、星空をながめるだけで幸せになれる。『あのどこかに、僕の花があるんだ』って思えるから。でも、もしヒツジが、その花を食べてしまったら、その人にとっては、まるで、星すべてが、突然、消えて無くなってしまったみたいになるんだ！それなのに、そんなことは大事じゃないって、きみは言うんだね！」

王子さまは、それきり何も言わなかった。そしていきなり、わあっと泣き出してしまった。

いつの間にか日は落ちて、僕は修理道具を手離れた。なんだか、どうでもよくなってしまった。エンジンのことも、堅く締まったボルトのことも、のどの渇きも、死ぬことさえも。ひとつの星

、僕の居場所。この地球という惑星の上に、慰めなきやいけない人がいる。今大事なことは、唯一それだけだった。僕は王子さまを抱き上げ、ゆっくりと立ち上がり、歩き始めた。

僕は王子さまに言った。「君の好きな花は、何も心配いらぬさ。僕がヒツジに口輪を描いてあげるから、大丈夫だよ」それから先、なんて言っているのか、僕にはわからなかった。それが正しかったんだと思う。言葉がない時間が必要だったんだと思う。

なんて僕は、不器用なんだろう、と心の底から思った。どうしたら、王子さまの心に触れられるのか、どこで王子さまの気持ちと一緒にいられるのか、僕にはわからないまま、ただ途方に暮れていた。

ただ涙の国というところは、とても不思議なところなんだ…としみじみと感じていた。

8. 王子さまとバラ

王子さまと話しているうちに、僕は、王子さまが気にかけている花のことが少しずつわかってきた。

王子さまの星には、ひと重の花びら持を持ったとても素朴な慎ましい花が咲いていた。その花は控え目な上に、誰の目障りにもならない本当に慎ましやかな花だった。朝、気が付くと草の中からひっそりと芽を出して、知らない間にか茎を伸ばし、葉を広げ、知らない間にか花を咲かせ、そしていつの間にか散っていなくなっている。そんな慎ましやかな花だった。

でも、王子さまの気にかけている花は、そのような慎ましい花のことではなかった。ある日、何処からか風に乗って種子が運ばれてきて、芽を出したバラの花のことでした。王子さまはいつも、そのバラの花の小さな芽を見つめていた。今まで見てきたひと重の慎ましい花の芽とは、全く様子が違っていたし、危険なバオバブの芽でもなかったから。

そのバラの茎はすぐに伸びるのをやめ、花を咲かせる準備を始めた。王子さまは、つぼみがどんどん膨らんでいく様子をじっと見つめていた。花が開くときはどんなに素晴らしいのだろうと毎日心待ちにしていた。

けれど、そのバラの花は緑色のつぼみの部屋に入ったまま、より美しく咲くためのおめかしの準備をなかなかやめなかった。どんな色合いのドレスがいいか、じっくりと選び、花びらをひとつひとつゆっくり整えていく。ひなげしみたいには、しわくちゃのまま出たくなかったのだろう。きらきらと輝くくらい、きれいになるまで、花を開きたくなかったのだろう。王子さまに聞くと、彼女はとってもオシャレさんだったらしかった。

だから、彼女はつぼみの中に隠れたまま、何日も何日も、身支度をし続け、ようやく、ある朝、ちょうどお日さまが昇るころ、ぱっと彼女が姿をあらわにしたのです。



あまりに身支度に念を入れすぎたせいか、そのバラの花はあくびをした。

「ふわあ、まだ眠いわ。目が覚めたばかりなの。ごめんなさいね。まだ、髪がくしゃくしゃで」
そのとき、王子さまの口から、思わず言葉がもれた。

「き、きれいだ！」

「綺麗でしょ」と彼女は何気なくそう言った。「だって私は太陽と一緒に生まれたのよ」

謙遜という言葉を知らない彼女は、つつましくもないけど、心が揺さぶられるほどの美しさだと王子さまはそう思ったのでした。

王子さまが見とれているのをよそにして彼女は突然、

「そろそろ朝のお食事の時間じゃなくて。このままあなたは、私をお腹を空かせたまま放って置くつもりかしら？」

王子さまは、あたふたと動揺しながら、水を花にかけてあげました。



こんな調子で、彼女は気が強く、疑り深く、見栄っ張りだったから、王子さまは、彼女にきりきり舞いにさせられた。例えばある日、彼女はこの王子さまに、四つのトゲを見せて、こう言ったのでした。



鋭いツメをかざして、

「トラがおそってきたって、私は平気よ。このトゲで追い返してやるんだから」

「トラなんて、僕の星にはいないよ」と王子さまは言いました。

「それに、トラは草なんて食べないよ」

「私、草なんかじゃないわ、失礼ね」と花は言った。

「ご、ごめん」

「私、トラなんて怖くないの、ただ、風にあたるのは大嫌い。風をよけるついででもないのかしら？」

風にあたるのが嫌いだって、やれやれ、困った花だ。この花、とっても気難しいなあと、王子さまは思いました。



「夜には、ガラスの覆いをかけてちょうだい。あなたのお家、とても寒くて、居心地が悪いわ。私が前にいたところはね……」

と、ここで花は話をやめた。花は種子の形でやってきたのだから、他のところなんて、知るわけなかった。つい無邪気にウソを言ってしまうようになったので、恥ずかしくなったようだけれど、花はコホンコホンとせきをして、ごまかして、王子さまのせいになろうとした。

「ついたては、持ってきてくださらないの？」

「取りに行こうとしたら、君がしゃべり始めたんじゃないか」

また花は、わざとらしくコホンとやった。

こんな調子だから、王子さまは、まっすぐ花を愛していたけど、すぐにすべてを信じられなくなった。大したことのない言葉も、王子さまは、正面からきちんと受け止めていたから、だからすごくつらくなっていった。

「聞いちゃいけなかったんだ」って、ある時、王子さまは僕に言った。「花の言うことは聞くものじゃなくて、眺めて、香りがかぐものだったんだ。僕の花は、僕の星を、とてもいい香りにしてくれた。でも、そのことを楽しめばいいっていうことが、その時のボクにはわからなかったんだ。トラのツメの話にしても、とてもイライラしてしまった。ボクはもっと彼女の気持ちをわかってあげなくちゃいけなかったんだ。きっとそうだったんだ……」

話は続いた。

「その時は、本当にわかんなかったんだ！言葉よりも、してくれたことを、見なくちゃいけなかったんだ。彼女は、僕の星をいい香りで包んでくれて、僕の気分を晴れやかにしてくれた。僕は絶対に、あの場所から逃げちゃいけなかったんだ！下手な計算の裏にも、優しさがあったのに。ただ彼女は、あまのじゃくなだけだったんだ！でもぼくは若すぎたから、愛する事って何なのか、わかんなかったんだ。」

9. 旅立ちと別れ

星を飛び立つのに、王子さまは渡り鳥を使ったんだと思う。

飛び立つ日の朝、王子さまは、星の片づけをした。火のついた火山のススを、丁寧にはらってやった。王子さまの星には、二つの火のついた火山があって、ミルクを温めるのにちょうどよかった。それと火の消えた火山も一つあった。王子さまは、その火の消えた火山も同じようにススをはらってやった。しっかりススをはらえば、火山は、爆発せずにチリチリと燻るだけだった。もしドカンと爆発しても、煙突から火が出るくらいの爆発なんだけど。

もちろん、僕らの住んでいる地球では、僕らはあまりにちっぽけなので、火山のススはいらないてできない。だから、僕らにとって火山というのはずいぶんやっかいものなんだ。



それから、王子さまはちょっとさみしそうに、バオバブの芽を引き抜いた。これが最後、もう二度と帰ってこないということを決めて。こういった、毎日決めてやってきたことが、この朝には、とても愛おしく思えた。

最後にもう一度、バラの花に水をやって、ガラスの覆いをかぶせようとしたとき、王子さまはふいに泣きたくなくなってしまった。

「さよなら」と王子さまは花に言った。

でも花は何も返事をしなかった。

「さよなら、僕はもう行くよ」と言った。

花は、コホンとやったけど、風邪のせいではなかった。



「わたしって、バカね」と花が言った。「許してね。あなたは幸せになってね」

バラの花がいつものように、つかかかってこなかったので、王子さまは動揺した。ガラスの覆いを持ったまま、その場に立ち尽くすことしかできなかった。バラの花がどうして穏やかで優しいのか、王子さまには全くわからなかった。

「ううん、好きなの」とバラの花は言った。「あなたがそのことわからないのは、わたしのせいね。もう今となっては、もうどうでもいいことよ…。でも、あなたもわたしと同じで、未熟だったのよ。お幸せにね。覆いはそのままにしておいて。もう、それだけでわたしは十分よ」

「でも風が……」

「あなたが思っているほど、そんなにわたしは弱くないわ。夜、ひんやりした空気にあたれば、きっと心地いいわ。あたし、花なんだから」

「でも毛虫は？」

「毛虫の1匹や2匹、我慢しなくちゃね。だって蝶たちと仲良くなるんだから。蝶ってすごくきれいなんですってね。そうでもしないと、ここには誰も来ないし。あなたは遠くに行ってしまうしね。トラが来てもこわくないわ。わたしには、トゲがあるから」

バラの花はうつむきながら、無邪気に四つのトゲを見せた。それからこう言った。

「そんなぐずぐずしないで、いらいらしちゃうじゃない。行くって決めたんなら、早く行きなさいよ。ほら！」

バラの花は自分の泣き顔を王子さまに見られなくなかった。バラの花は、誰にも弱みを見せたくないものだから。

10.王様の星

王子さまは、小惑星325、326、327、328、329、330と番号で呼ばれている星を見てまわった。今まで生きてきて知らなかったこと、これからやらなければいけないことを見つけるために。

最初の星には、王様が住んでいました。その王様は、貂の白い毛皮のマントを纏って、威厳のある椅子に腰かけていた。



「おやおや！わしの家来が来たではないか」と王子さまを見ると王様は声をあげた。

王子さまは、どうして、ボクのことを家来だって思うんだろう？初めて会ったばかりなのに不思議に思った。

王様にとっては、世界はとてもシンプルなものだった。支配する者と支配される者。王様から見たら、誰もがみんな、自分の支配する家来だということを王子さまは知らなかった。

「側に寄れ、そしてそなたの顔をよく見せい」王様は、やっと誰かに王様らしく振る舞うことができる、うれしくてたまらなかったようだった。

王子さまは、どこかに腰を下ろそうと、周りを見まわした。しかし、星は王様の大きな貂の毛皮のマントの裾で独占されていて、どこにも腰を下ろすことができなかった。王子さまは仕方なく立っていることにした。長旅をしてきて腰も下ろせず、とても疲れていた。そして、つい王様の前で欠伸をしてしまった。「ふあ～あ」

「王の前で欠伸とは、無礼であろう。欠伸は禁止じゃ」と王様は命令した。

「我慢なんてできませんよ」と王子さまは答えた。「長旅をしてきたので、あまり寝ていないのです」

「ならば、欠伸をすることを命ずる。人の欠伸を見るのも、ずいぶん久しいからな。そなたに命じる。さあ、欠伸をせよ」

「そんなこと言われても、すぐに欠伸は出ませんよ」と王子さまは答えた。

「むむむ！では、あるときは欠伸をし、そしてまたあるときは……」と王様は、不機嫌そうに言葉をつまらせた。

なぜなら王様は、なんでも自分の思い通りになると思っていて、そこから外れるものは、許せなかった。いわゆる〈絶対の王様〉だった。でも気は優しかったので、物わかりのいいことしか、命令しなかった。

王様は命令をするにしても、「将軍に海鳥になれ！」と言って、将軍が命令を聞かなかったとき、それは将軍のせいではなく、不可能なことを命じる自分が悪いことを知っていた。

「座っていいでしょうか？」と王子さまは気まずそうにいった。

「そなたに命ずる。そこへ座りなさい」王様は毛皮の裾を少し引いて、王子さまに言いつけた。

王子さまにはよく理解できないことがあった。この星はとても小さいのに、王様はいったい、何を支配しているんだろう？

「王様、恐れながら、質問があります」

「質問をせよ」と王様は答えた。

「王様は、いったい何を支配されているんですか？」

「すべてじゃ。目に映るものすべてじゃ」と王様は当たり前のように答えた。

「すべて。ですか？」

王様はそっと指を出して、自分の星と、他の惑星とか星とかを順に指差していった。

「目に見えているものだけ！それがすべてですか？」と王子さまは言った。

「それがすべてである！」と王様は答えた。

「なら、星の巡り合わせはみんな、王様の言う通りになるのでしょうか？」

「もちろん」と王様は言った。「たちまち、わしの言う通りになるであろう。それを守らぬものは、許さんからな。あっはっはっ」

あまりの権力の強さに王子さまは驚いた。自分にも、もしそれだけの力があれば、44回とは言わず、72回、いや100回でも、いや200回でも、夕暮れがたった1日の間に見られるのではないかと、しかも椅子も動かさずに！そう考えた時、ちょっと切なくなった。ふと、自分の小さな星を捨

ててきたことを思い出してしまった。

思い切って王様にお願いをしてみた。

「夕暮れが見たいのですが、どうかお願いします。お日様に沈むように命令してくださいませんかでしょうか」

「もし、将軍に花から花へ蝶のように飛べ！シェイクスピアより悲しい話を書け！遠くの島へ渡る海鳥になれ！と命令して、将軍が、その命令に背いたとしよう。その場合、将軍とこの王、どちらが間違っていると、そなたは思うかな？」

「恐れながら、王様の方が悪いのではないのでしょうか」と王子さまは恐る恐る答えた。

「そうであろう。そなたは素直な家来であるな。人それぞれには、それぞれのできることを任さねばならぬ。その器量をはかることが出来て、はじめて支配する力があると言えるのじゃ。もし、国民の皆に『海へ飛びこめ！』と言いつけようものなら、その国はたちまち滅びてしまう。命令するということは、物事をわきまえて、言いつけることだからである」

「それでは、ボクの夕暮れは実現できないのでしょうか？」と王子さまはうつむいた。

「そなたの日没なら、見られるぞ。命令しよう。だが、その時まで待たなければならぬ。うまくおさめるためにも、いい頃合いになるまで待たねばならぬのじゃ」

「それはいつでしょうか？」と王子さまは尋ねた。

「うーむ」と王様は考え込んで、分厚い〈曆〉を開いた。「むむむ！そうだな午後7時40分くらいであるな。さすれば、そなたの望むとおりになるであろう」

王子さまは、大きな欠伸をした。すぐに夕暮れに会えなくて、残念に思った。そして、待っているだけということに退屈を感じていた。

「もうここでは、することは何もないようですから、そろそろ次の星へ行くことにします」と王子さまは王様に言った。

「行ってはならん。行ってはならぬぞ」と王様は大きな声で言った。

王様は、家来ができて、優越感を感じられることがよほどうれしかった。「行ってはならん、そちを、この星の大臣にしてやるぞ」

「大臣になって、何をするの？」

「法務大臣となり、人を裁くのじゃ」

「でも、裁くにしても、裁く人がこの星には誰もいないじゃないですか？」

「そうとは限らん。わしはまだこの星をぐるりとまわってみたことがない。歳をとってしまったし、大きな馬車を置く場所もないからな。歩いてまわるのは、ずいぶん、くたびれるんでな」

「そうですね！でも、ボクはもう見ましたよ」と王子さまは、もう一度ちらっと星の反対側を見た。「あちらの方には、誰もいないようでした」

「それならば、そなた自身を裁けばよかろう」と王様は答えた。「その行為はとても困難であるぞ。自分を裁く方が、他人を裁くよりも、はるかに困難じゃ。うまく自分を裁くことができたなら、そなたは本当に賢い人間じゃ」

すると王子さまは言った。「どこにいたって、自分を裁けます。ですから、この場所に居続ける必要はありません」

王様は王子さまの言ったことを聞こえないふりをして、

「ああ、たしか、この星のどこかに、年老いたネズミが1匹おるはずじゃ。夜、物音がするからな。そのネズミを裁けばよかろう。ときどき、死刑を言い渡しても構わん。つまり、その命は、そなたの裁き次第である。だが、ネズミを上手に活用するためには、いつも許してやることじゃ、大切にせねばならん。ネズミは1匹しかおらんのだからな」

「ボク、誰かを死刑にするのは嫌いだし、もう行きたいんです」

「ならん！」と王様は言った。

もう、王子さまは出発の準備も整い、いつでも行けたんだけど、王子さまは、年寄りの王様をしょんぼりさせたくなかった。

「もし、陛下の命令通りになるのをお望みなら、物事をふまえたことを命令できるはずです。『今すぐに出発せよ』と！」

王様は何も言わなかった。王子さまはとりあえず、どうしようかと思ったけど、溜め息をついて、この星をあとにしようとした。

そのとき、王様は慌てて「そなたを、ほかの星へ大使として遣わせるぞ！」と言った。

全くもって偉そうな言い方だった。

大人たちって、とても不思議だな、と王子さまは心の中で思いつつ、旅は続く。

11.自惚れ屋の星



王子さまが訪れたふたつめの星には、自惚れ屋が住んでいました。

「おや、俺様のファンが来たじゃないか」王子さまを見るなり、自惚れ屋は声をあげた。自惚れ屋にかかれば、誰もがみんな自分のファンなのだ。

「こんにちは」と王子さまは言った。「変わった帽子だね」

「この帽子かい。おしゃれだろ。挨拶するためにあるんだ」と自惚れ屋は言った。「拍手をされたら、これで挨拶する。あいにく、ここを通り過ぎる人はめったにいないわけだが」

「どうして？」王子さまは、何のことかわからなかった。

「両手で、拍手してみな」と自惚れ屋は王子さまに言った。

王子さまは、パチパチと拍手をしてみた。自惚れ屋は、帽子をちよいと持ち上げて、仰々しい挨拶をした。

王様の所よりも楽しいかもしれないと、王子さまは心の中で思った。そしてもう一度、拍手を

してみた。自惚れ屋は、また帽子をちよいともち上げて、さらに仰々しく挨拶をした。

何度が続けている内に、同じことの繰り返しばかりなので、王子さまはこのタテマエだけの挨拶遊びには飽き飽きしてしまった。

「ねえ、その帽子を脱いでもらうには、どうしたらいいの？」と王子さまは聞いた。

でも、自惚れ屋には聞こえてなかった。というより聞こえないふりをした。自惚れ屋は、褒め言葉にしか、耳を貸さないのだった。

「キミは心の底から、俺様を称えているのかい？」と自惚れ屋は王子さまに聞いた。

「称えるって、どういうこと？」

「称えるというのは、この俺様が、この星で一番かっこよくて、一番オシャレで、一番金持ちで、一番賢いんだって、認め、褒めることさ」

「でも、この星には君しかいないじゃないか！」

「お願いだ、とにかく俺様を称えておくれ」

「称えるよ」と言って、王子さまは、肩をちよつと上げた。「でも、あなたにとっては、そんなことが大切なわけ？」

そして王子さまは、自惚れ屋の星をあとにした。

大人たちって、やっぱり変だと、王子さまは心の中で思いつつ、旅を続けた。

12. 呑み助の星

次の星は、呑み助の星だった。ほんの少しの時間だけ寄っただけなのに、王子さまは、気持ちをとても落ち込ませてしまった。

「あなたは、ここで何をしてるの？」と王子さまは、呑み助に聞いた。呑み助は王子さまを見るなり、空のビン（過去）と中身の入ったビン（現在）を並べて、ビンをうつろな目でぼんやりと見つめながら、黙っていた。



「たぶん置かれている現実を呑み込んでいるんだ」

「何で、呑み込んでいるの？」

「もう考えたくないんだ。そして忘れてしまいたいんだよ」

「何を忘れたいの？」と王子さまは気の毒になって聞いてみた。

「恥ずかしい自分を忘れてしまいたいんだよ」と呑み助はうつむきながら、王子さまに打ち明

けた。

「何が恥ずかしいのさ？」と呑み助の助けになりたくて聞いてみた。

「呑み込もうとしている自分、呑み込んでしまった自分がとても恥ずかしいんだ」呑み助は、そう言ったきり、とうとう黙り込んでしまった。

どうしていいかわからず、王子さまは、そこを後にした。

大人たちって、やっぱり変だと、王子さまは心の中で思いつつ、旅を続けました。

13. 仕事人間の星

四つめの星は、仕事人間の星だった。この人は、とても忙しいので、王子さまが来たときも、王子さまには全く目もくれず、少しも顔を上げなかった。それほど忙しそうにしていた。



「こんにちは」と王子さまは挨拶をした。「煙草の火が消えていますよ」

「 $3 + 2 = 5$ 。 $5 + 7 = 12$ 。 $12 + 3 = 15$ 」

「こんにちは」

「 $15 + 7 = 22$ 。 $22 + 6 = 28$ 」

「私には火を点け直す暇なんてない。 $26 + 5 = 31$ 。ふう。これで合計が、5億162万2731と...」

王子さまは「何ですか？その5億…って？」と質問した。

「ん？お前まだいたのか。5億……もうわからん。私は忙しいんだ。やらなきゃいけないことが山ほどたくさんあるんだ！私は、まじめに仕事をしているからな。私はキミと無駄口をたたいてる暇なんてないんだ！ $2 + 5 = 7$ …」

「何なの！？その5億100万……っていうのは？」と王子さまはもう一度質問した。

仕事人間は、やれやれという感じでやっと顔を上げた。

「54年この星に住んでいるが、邪魔が入ったのは、三度だけだ。最初は、22年前のこと、コガネムシがどこからか飛んできて、ブンブンとうるさくしたから、足し算を4回も間違えてしまったんだ。二度目は、11年前、リウマチの発作が起きたせいだ。運動不足で、私には忙しくて歩く暇もないからな。まじめに仕事をしているからな。私は！そして三度目は、まさに今日だ！さてと、5億100万……」

「ねえ、5億100万……も、何があるの？」と王子さまは大声を出した。

仕事人間は、王子さまに放っておいてはもらえないと、ついにあきらめた。

「あの小さいヤツさ、ときどき空に見えるだろ」

「ハエですか？」

「いや、その小さいのは、光っておる」

「ミツバチ？」

「いや。その小さいのは、輝いていて、怠け者をうっとりさせるんだ。だが、まじめに仕事をしている私は、そんなものにうっとりしている暇なんかない！」

「星っ？星ですね」

「そうだ、星だ」

「じゃあ、5億100万……の星をあなたはどうするの？」

「正確には5億162万2731。まじめに仕事をしているんだ、私は」

「それで、星をどうするのですか？」

「どうするかって？」

「うん」

「そんなの自分の所有物にするに決まっておろう」

「あの星たちが、あなたの所有物？」

「そうだ」

「でも、さっきあった王様は…」

「王様は、自分の所有物にはしない、支配しているだけなんだ。まったく違う」

「じゃあ、星が自分の所有物だと、何のためになるの？」

「お金持ちになれる！」

「じゃあ、お金持ちになると、何ができるの？」

「また別の星が買える、新しいのが見つかったらな！」

この人、ちょっと屁理屈こねてるじゃないかな。さっきの酔っ払いと同じだ。と王子さまは心の中で思った。でもとりあえず、王子さまは質問を続けた。

「どうしたら、星が自分の所有物になるのですか？」

「あそこに星が一つあるじゃろ。あれは、誰のものだと思う？」と仕事人間は、ぶっきらぼうに返事をした。

「わかんない。ボクは誰の物でもないと思う」

「じゃあ、私の物だ。最初にそう思いついたんだからな」

「そんなのでいいの？」

「もちろん」

「例えば、キミが、誰のものでもないダイヤを見つけたら、それはキミの物になる。誰の物でもない島を見つけたら、それはキミの島だ。最初に何かを発明したら、特許が取れる。キミの発明だ。だから、私は見つけた星を私の所有物にする。なぜなら、私より先に、誰一人も、そんなことを思いつかなかったからだ」

「ふーん、なるほど」と王子さまは言った。「で、それをどうするの？」

「運用するんだよ。右へ左へとな」と仕事人間は言った。「難しいぞ。だが、わしは、仕事一筋人間だから、それができる」

王子さまは、少しも納得できなかった。

「ボクは、スカーフ1枚、ボクのものだったら、首に巻きつけて、お出かけするんだ」

「ボクは、花が1輪、ボクのものだったら、その花を摘んで持っていく。でも、星は摘めないよね？」

「そうだな。摘むことはできない。だが、銀行に預けられる」

「それってどういうこと？」

「自分の星の数を、小さな紙切れに書きとめるってことだ。そうしたら、その紙を、ひきだしにしまって、カギをかける」

「それだけ？」

「それだけでいいんだ！」

王子さまは、仕事人間の所有の話聞いて、面白いと感じた。それなりに筋が通っているように見えてきた。でも、まだまだ納得できなかった。

王子さまは、所有することについて、大人たちと、違った考えを持っていた。

「ボク……」と、王子さまは言葉を続ける。「花が1輪、ボクのもので、毎日水をやります。火山が三つ、ボクのもので、毎週、ススほらいをします。それに、火が消えてる火山も、ススほらいをします。万が一があるといけないから。だからボクのやっていることは、火山のためにも、花のためにもなっています、それがボクのものにしているってことです。でも、あなたは星のために何もやっていないですよ」

仕事人間には、返す言葉が、見つからなかった。そして王子さまは、その星を後にした。

大人たちって、やっぱり変だ、と王子さまは心の中で思いを募らせながら、旅を続けました。

五つ目の星は、とても不思議なところだった。他のどの星よりも小さかった。そこには、一本の街燈と一人の点燈夫が居る場所があるだけだった。



王子さまは、どうしても理解できなかつた。広い宇宙のこんな辺鄙な場所で、家もないし、他に誰も住んでいないのに、一本の街燈と一人の点燈夫がいて、何のためになるんだろうか、と。

でも、王子さまは、心の中でこう思った。この人は、みんなに馬鹿にされるかもしれない。でも、王様、自惚れ屋、仕事人間や呑み助なんかよりは、ずっといい。点燈夫のやっていることには、意味がある。街燈をつけるってことは、星や花が新しく生まれることと同じだから、街燈を消すのは、星や花を眠らせることと同じだから。とても素敵な行為だと思う。知らない誰かのた

めの。

王子さまは星に近づくと点燈夫に敬意を払ってあいさつをした。

「こんにちは。どうして今、街燈を消したの？」

「消せと指示されているから消しただけさ」と点燈夫は答えた。

「指示されているって、何を？」

「この街燈を消せってことをさ。こんばんは」とその点燈夫は、今度は街燈を点けた。

「えっ、どうして、今、また点けたの？」

「点けろと指示されているからさ」と点燈夫は答えた。

「よくわかんないんだけど」と王子さまは言った。

「わからなくていいよ」と点燈夫は言った。「消せと指示されたら消す。点けろと言われたから点ける。ただそれだけさ。こんにちは」と言い街燈を消した。

それから、点燈夫は、おでこを赤いチェックのハンカチでふいた。

「本当にきつい仕事だよ。この仕事は！昔は、まだ良かったんだ。朝消して、夜つける。昼の余った時間を休んで、夜の余った時間は、寝ていられたんだ」

「じゃあ、その頃とは、別のことをしろと指示されているの？」

「同じことをし続けろと指示されている」と点燈夫は言った。「聞いてくれよ。それが本当に、ひどい話なんだ！この星は年々、まわるのがどんどん早くなっているのに、同じことをしろって指示するんだ！」

「つまり？」

「つまり、今では、この星は1分でひと周りするから、僕には休む時間が、少しもない。1分の間に、点けたり消したりしなきゃいけないんだ！」

「変なの！君んちじゃ、1日が1分だなんて！」

「何が変だよ」と、点燈夫が言った。「もう、僕らは1カ月も一緒にしゃべっているんだよ」

「1か月も？」

「もう30分も話しているから、30日さ！」「こんばんは」と点燈夫はまた明かりを点けた。

王子さまは、点燈夫のことをじっと見た。指示されたことを、こんなにも真面目にやる点燈夫のことが好きになった。

王子さまは、夕暮れを見たいとき、自分からイスを動かしていたことを思い出した。王子さまは、点燈夫をどうにか助けてあげたかった。

「ねえ……休みたいときに、休める方法、ぼく知ってるよ」と王子さまは言った。

「どうしたら休めるんだい。私はいつだって休みたいんだ。教えてくれよ」と点燈夫は言った。

人っていうのは、真面目にやっても、大概は怠けたいものなんだ。

王子さまは、言葉が続けた。

「君の星、小さいから、大股なら3歩で一回りできるよね。ずっと日向にいられるように、ゆっくり歩くだけでいいんだよ。休みたくなったら、君は歩く。そうすれば好きな分だけ、明るい時間がずっと続く。」

「歩き続けることなんて望んでいないよ」と点燈夫は王子さまに言った。「僕がずっと願ってる

のは、働くことをやめて眠ることなんだ」

「困ったことだね」と王子さまが言った。

「困ってしまうよね」と点燈夫も言った。「こんにちは」と街灯を消した。

王子さまは、点燈夫の星を後にして、旅を続けながら、こんな風に思った。あの人、他のみんなから、バカにされるだろうな。王様、自惚れ屋、呑み助、仕事人間からは。でも、僕からしてみれば、たった一人、あの人だけは、不思議だと思わなかったんだ。

それは、点燈夫が、自分のためじゃないことのために、一生懸命働いていたから。

王子さまは、残念そうにため息をついて、さらに考えていた。

たった一人、点燈夫だけが、ボクは友達になれると思った。でも、あの人星は、ほんとに小さすぎて、二人も入らない場所だったんだ。

王子さまは、このとてもとても小さな星のことを24時間に1440回も夕暮れが見られるっていう恵まれた星なのにと、点燈夫は、なぜそう思えないんだろうと残念に思っていた。

六つ目の星は、王子さまの星の10倍も大きい星だった。分厚い本をいくつも机の上に置いてある、地理学者の住まいだった。



「おや、お前さんは、探検家じゃな」と王子さまを見るなり、地理学者の老人は声をかけた。

王子さまは、机の前に腰をかけてひと息ついた。長旅で疲れていた。

「キミは、どこから来たんだね？」と老人は質問した。

「その分厚い本には、何が書いてあるのですか？」と王子さまは尋ねた。「あなたは、ここで何をしてるのですか？」と続けて質問した。

「わしは、地理学者じゃ」と老人は言った。

「地理学者というのは何をする人なの？」

「海、川、町、山、砂漠のあるところをよく知っている、物知りのことじゃ」

「面白そうですね」と王子さまは言った。「やっと、本物の仕事と呼べるものに出会えた気がします」それから王子さまは、地理学者の星をぐるりと見まわした。こんなにも大きな星を、王子さまは、今まで見たことがなかった。

「とっても素晴らしい星ですね。この星には、海は、あるのですか？」

「知らん」と地理学者は言った。

「えっ！（王子さまは、がっかりした）じゃあ、山は？」

「それも知らん」と地理学者は言った。

「じゃあ、町とか川とか、砂漠とかは？」

「それも、まったくもって知らん」と地理学者は言った。

「でも、地理学者なんでしょ！」

「そうじゃ」と地理学者は言った。「だが、探検家ではない。それに、わしの星には探検家がおらんからな。地理学者はな、町、川、山、海や砂漠を数えに行くことはしない。地理学者というのは、偉い人なので、歩きまわったりはしないのじゃ。だから自分の机を、離れることはない。そのかわり、探検家を迎えるんじゃ。地理学者は、探検家にものを尋ね、その話を聞き取る。その話で、重要なものがあつたら、そこで地理学者は、その探検家が信頼のおける正直者かどうかを調べるんじゃ」

「どうして？」

「探検家が嘘をつくと、地理の本はデタラメになってしまうからのう。また呑み助の探検家も、同じじゃ」

「どうして？」と王子さまは言った。

「呑み助は、ものがだぶって見えたり、偏って見えたりする。そうすると、地理学者は、実際には一つしかない山なのに、二つ山があるように、書き留めてしまったり、右左どちらかに偏って書き留めてしまうからの。気をつけねばならん」

「探検家に、不向きな人、ボク会ったことあるよ」と王子さまは言った。

「そして、その探検家が、信頼のおける正直者そうだったら、地理学者は、何が見つかったのか、確かめることになる。」

「見に行くの？」

「いや。それだと、あまりにめんどろじゃ」

「実際に見に行かなくてもわかるの？」

「地理学者は、探検家に、それを信じさせるだけの証拠を出せ、と言うのじゃ。たとえば、大きな山を見つけたと言うのであれば、大きな石ころでも持ってこさせなきゃならん」

今度は地理学者が、王子さまに質問をした。

「たしかキミは遠くから来たんじゃったな。だからキミは探検家だ。さあ、わしに、キミの星のことを語ってくれんかのう」

そうして、地理学者はノートをひらいて、鉛筆を削った。地理学者というものは、探検家の話をまず、鉛筆で書き留める。それから、探検家が、信じられるだけの証拠を出してきたら、インクで書き留める。

「それで？」と地理学者は尋ねた。

「えっと、ボクの星は……」と王子さまは言った。「あんまり面白くないし、すごく小さいんだ。三つ火山があつて、二つは火がついていて、一つは消えている。でも、万が一があるかもしれない。」

「万が一があるかもしれない」と、地理学者は言った。

「花もあるよ。」

「わしらは、花のことについては書き留めん」と地理学者は言いきった。

「どうしてなの？ボクの星で一番きれいだよ！」

「花は儂いものだからじゃよ」

「儂ってどういうこと？」

「地理の本は、すべての本の中で、一番正しくあるものじゃ。絶対古くなったりしないからな。山が動いたりすることなどめったにない。大海原が干上がるなんぞもめったにない。わしらは、不変なものを書くんじゃ。かわっていくものなど書くことに意味はないのじゃよ」

「その儂って何ですか？」また王子さまは質問した。

「それは、すぐに消えてなくなってしまうということじゃ」

「ボクの花は、すぐに消えてなくなってしまうの？」

「無論じゃ」

「ボクの花は、儂いんだ」と王子さまは思った。「それに、周りから自分を守るのは、四つのトゲしかない。それにボクは、そんなバラの花をたった一人置き去りにしてきたんだ」

王子さまは、ふいに、胸をきつく締め付けられた。でも、気を取り直して、

「これからボクが行く星はありませんか？」と王子さまは、地理学者に尋ねた。

「地球という星はどうじゃろう」と地理学者は言った。「いいところだと聞いておる」

そうして、王子さまは、そこを後にした。自分のバラの花のことを想いながら……

そうして王子さまが、最後に行き着いた七つ目の星は、地球だった。

地球という星は、今まで訪れた他の星とは全く違っていた。地球には、111人の王様がいて（もちろん黒い顔の王様も入れて）、7000人の地理学者、90万人の仕事人間、750万人の呑み助、3億1100万人の自惚れ屋、そして46万2511人もの点燈夫がいた。合わせて20億人くらいの大人たちがいた。

電気が使われるまでは、六つの大陸では、点燈夫たちの動きは、バレエのダンサーみたいに整然としていて大変見ものだった。まず最初、ニュージーランドとオーストラリアの点燈夫の出番が来る。彼らは街灯をつけ終わると、彼らは眠りにつく。すると次は中国とシベリアの点燈夫の番が来て、この動きに加わって、終わると、彼らも眠りにつく。そしてロシアとインドの点燈夫の番になる。次はアフリカとヨーロッパ。それから南アメリカ、それから北アメリカ。しかも、彼らは自分の出る順を、絶対間違えない。

でも、北極と南極の二人の点燈夫は、のんびりと毎日をおくっていた。彼らは、1年に2回だけ働くだけでよかった。

うまく言おうとすると、ちょっとウソをついてしまうってことがある。点燈夫のことも、全部ありのままというわけじゃないんだ。何も知らない人に、地球のことを勘違いさせてしまったかもしれない。地球のほんの一部しか人間のものじゃないんだ。地球に住んでいる20億の人に集まってもらって、まっすぐ立ってもらっても、縦30キロ×横30キロの広場に収まってしまう。実は太平洋で一番小さな島にだって、全員入ってしまう数なんだ。

でも、大人たちにこんなことを言っても信じてはもらえない。いろんな場所が自分たちのものだってそう思っているんだから。自分たちはバオバブくらい大きいものだってみんな考えている。だから、そんな人たちには計算することを勧めてごらん。数字が大好きな大人たちは、きつとうれしがるから。でも、みんなはそんなつまらないことで、時間をつぶさないようにして欲しい。数字は惑わすだけだから。みんな、僕を信じて欲しい。

王子さまは地球に着いたけど、人間の姿がどこにもなくてびっくりしていた。



星を間違えたのかなと思っていたとき、砂の中で金色をした輪っかが、もぞもぞと動いた。「こんばんは」と王子さまが言ってみると、

「こんばんは」と金色のヘビが挨拶を返した。

「ボク、どこの星に落ちこちたの？」と王子さまが聞くと、

「地球の砂漠のど真ん中さ」とヘビが答えた。

「地球には人間がないの？」

「ここは、砂漠だから人間はいない。砂漠には人間はいない。砂漠は人間が住むべき場所じゃないからね。地球はとても広いんだよ」とヘビは言った。

王子さまは石の上に座って、目を空の方へやった。

「星がきらきらと輝いているのは、みんなが、ふとした時に、自分の星を見つけられるようになるためなのかな。ほら、ボクの星が真上にあるよ。でも、ほんとに遠いなあ！」

「キミの星は綺麗な星だね」とヘビは言った。「地球へは、何しに来たんだい？」

「バラの花とうまくいなくてね」と王子さまは言った。

「そういうことか」とヘビは言った。

それで、しばらく二人は何も言わなかった。



「砂漠は、とてもさびしいところだね。孤独だよ。人間はどこにいるの？」と王子さまが聞いた

。

「周りに人間がたくさんいても、人間は孤独さ」とヘビは言った。

王子さまは、ヘビをじっと見つめた。

「君って、変な生き物だね」と王子さまが言った。「指みたいに、細くて弱々しく見える」

「でも、王様の指より強いんだぜ」とヘビは言った。

王子さまは笑った。

「君がそんなに強いわけないよ。手も足もないし、旅だってできやしないよ」

「船よりも、ずっと遠くへ、君を連れて逝くことだってできるさ」とヘビは言った。

ヘビは王子さまのくるぶしに、金の足輪みたいにぐるりと巻きついた。

「おれに嘸みつかれた者は、もと居た場所に還ることができる」と言葉を続けた。

「キミは純粹すぎる。穢れを知らな過ぎるんだ。それにキミは他の星から来た。遠くの星からね……だから」

王子さまは、何も返事をしなかった。

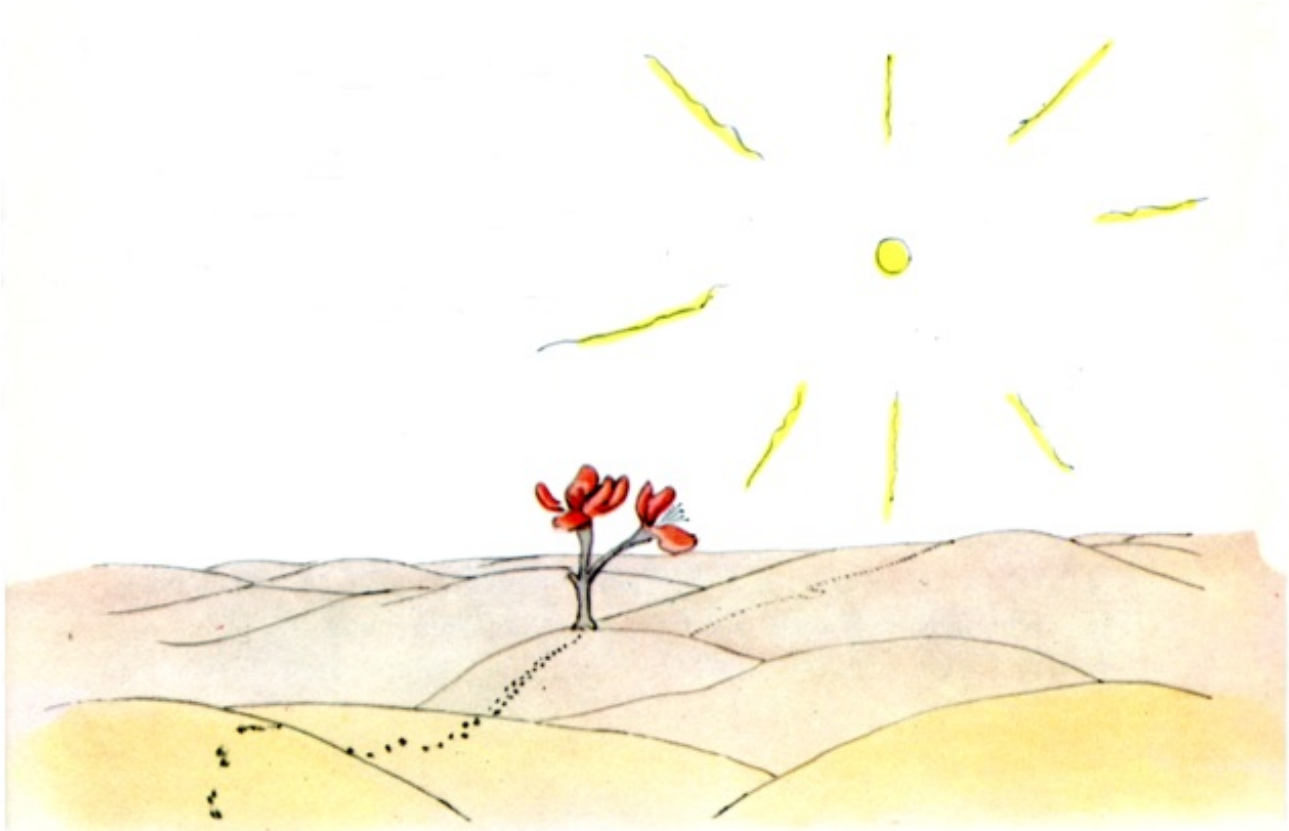
「キミを見ていると、本当にかわいそうに思えてならないよ。この堅い岩でできた地球の上で、力もないキミがこれからどうするか……。おれなら、助けになれるかもしれない。自分の星に帰りたくなったら、いつでも助けを求めな」

「わかった」と王子さまは言った。「何でいつも、謎めいた言葉を言うの？」

「そのものが、その答えだからさ」とヘビは言った。

そして、二人は沈黙した。

王子さまは、砂漠を歩き回ったけど、たった一輪の花に出会っただけだった。花びらが三枚だけの花で、ただそれだけの花だった。



「こんにちは」と王子さまが言うと、

「こんにちは」とその花が挨拶を返した。

「人間を探しているんだ。人間はどこにいるの？」と王子さまは尋ねた。

花は、いつだか、人間の行列が通り過ぎるのを見たことがあった。

「あなた、人間を探しているの？どこかにいると思うわ。6人か7人。何年か前に見かけたから。でも、どこで会えるかは、わたしには全然わからないわ。風まかせだもん。人間たちって！根っこがないのよ。それってずいぶん不便だと思わない」

「さようなら」と王子さまが言うと、

「さようなら」と花も言った。

王子さまは、高い山に登った。それまで王子さまの知っていた山といえば、丈が膝までの小さな火山が三つだけだった。しかも、消えた火山は腰かけに使っていたくらい。だから、王子さまはこんなふうに考えた。「こんなに高い山からなら、ひと目で、この地球全体と人間全員を見渡せるはずだ」でも、見えたのは、鋭くとがった岩山ばかりだった。



「こんにちは！」と、王子さまが挨拶すると、

「こんにちは……こんにちは……こんにちは……」とこだまが返事をする。

「君は誰？」と王子さまが叫ぶと、

「君は誰……君は誰……君は誰……」とこだまがまた返事をする。

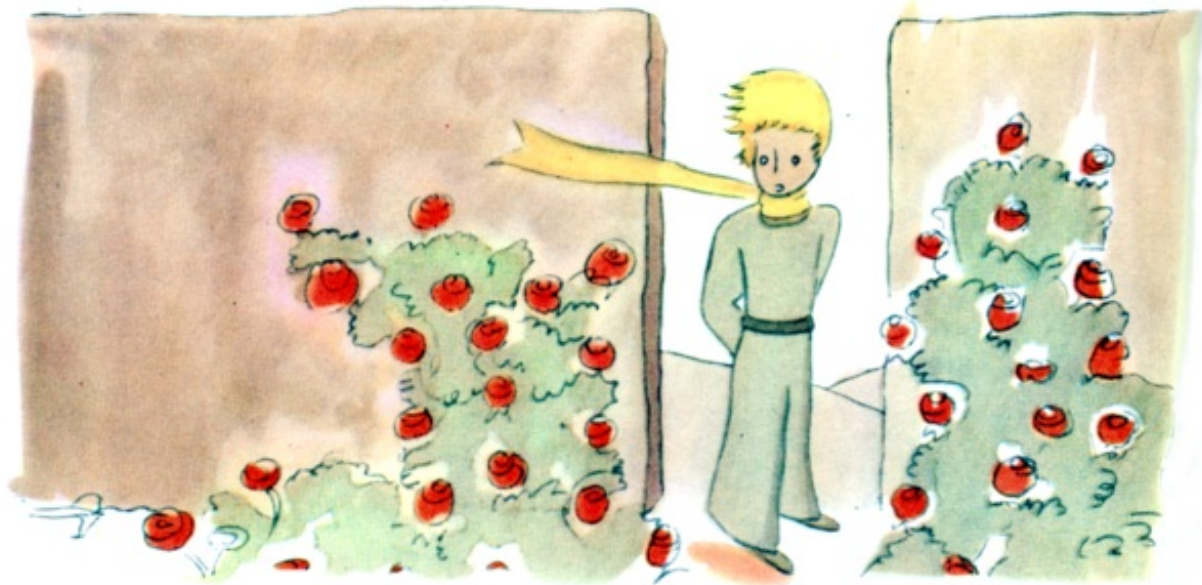
「友達になってよ、ぼく独りぼっちなんだ」と王子さまが言うと、

「独りぼっち……独りぼっち……独りぼっち……」とこだまが返事をする。
なんて変な星なんだろうと王子さまは思った。「カサカサ乾いているし、トゲトゲしているし、ヒリヒリしてる。人間って、想い描く力がないんじゃないのかな。物事を繰り返すだけだし……僕の星にあるバラの花は、いつも向こうからしゃべりかけてきてくれたのに……」

さて、王子さまが、砂漠を、岩山を、雪の上をこえて、どんどん進んでいくと、ようやく1本の細い道に行きついた。その道をゆけば、人間のいるところへ辿り着けるようだった。

「こんにちは」と王子さまは言った。

そこは、バラの花が咲きほこる庭だった。



「こんにちは」とバラ達がいっせいに王子さまに挨拶を返した。

王子さまは、たくさんのバラ達を眺めた。みんな、王子さまの花にそっくりだった。

「君たち、何て名前なの？」と王子さまは聞いた。

「うふふ、わたしたち、バラっていうのよ」とバラ達がいっせいに答えた。

「えっ！」と王子さまは言って……

そのあと、自分がみじめに思えてきたんだ。王子さまのバラの花は、宇宙に自分と同じ花なんてないって、王子さまにたびたび言っていた。それがどういうだろう、この庭だけでも、似たような花が全部で、5000本もある。

王子さまは思った。「彼女、こんなのを見たら、すねちゃうだろうな。きっと、とんでもないほど、コホンコホンとやって、枯れたふりをするだろうな。バカにされないようにするだろうし、そうしたら、ボクは、手当てをするふりをしなくちゃいけなくなる。だって、そうしなければ、ボクへのあてつけて、彼女は自分を枯らしちゃうよ」

それからこうも考えた。「この世に一つしかない花があるから、自分はぜいたくなのだと思っていた。でも、ほんとうは、ありきたりのバラがたった一本あっただけ。それと、ひざ丈の火山三つで、そのうち一つは、たぶん、ずっと消えたまま。これじゃあ、いつまでたっても立派で偉い主にはなれない」そうして、草むらにつつぶして、涙を流した。



キツネは、そんな時にあらわれた。

「こんにちは」とキツネは王子さまに声をかけた。

「こんにちは」と王子さまは返事をして振り返ったけれど、声のした方には、誰もいなかった。

「こっちだよ。リンゴの木の下だよ」とキツネが王子さまを見上げる。



王子さまは、キツネに「君は、誰？とってもかわいいね」

「オイラ、キツネさ」とキツネは応えた。

「ボク、今とても切ないんだ。こっちにきて、一緒に遊ぼうよ」と王子さまが誘うと、

「オイラは、キミとは一緒に遊べないよ」とキツネは言った。「そもそもオイラ、キミに飼い馴らされちゃいけないからね」

「ごめんなさい」と王子さまは申し訳なさそう謝った。

でも、疑問に思って、王子さまはキツネに質問した。

「飼い馴らすって、一体どういうことだい？」

「キミはこのあたり人間じゃないね」とキツネが言った。「何か探してるのかい？」

「人間を探してる」と王子さまは言った。

「ねえ飼い馴らすって、どういうことなの？教えてよ」

「人間を探してるだって！」とキツネは驚いて言った。

「あいつら、鉄砲を持って、狩りをするんだぜ。敵味方もかまわず。オイラにとってはいい迷惑だよ！オイラにとって人間はニワトリを飼っているということだけが取り柄なんだ。キミはニワトリも探しているかい？」

「うん。僕はニワトリは探していないよ」と王子さまは言った。

「友だちを探しているんだ。ねえ、飼い馴らすって、どういうこと？」

「もう誰もが忘れてしまったことだけど、絆をつくるってことだよ」とキツネは言った。

「絆をつくる？」

「そうだよ。絆を作るということさ」とキツネは言う。

「オイラにしてみりゃ、キミはまだ他の10万人の男の子と何の変わりもない。キミでないとダメだって理由はどこにもない。キミだって、オイラでないとダメだっていう理由は、たぶんまだないだろ。キミにしてみても、オイラは他のキツネ10万匹と何の変わりもないからね。でも、キミがオイラを懐けることになったら、オイラたちはお互い相手にそばに居て欲しいって思うようになるだろ。キミは、オイラにとって、世界にたった一人だけの存在になるし、オイラも、キミにとって、世界で1匹だけの存在になるんだ。素晴らしいことだと思わないかい」

「ボク、少しだけ、わかってきたよ」と王子さまは言った。

「ボクの住んでたところには、一輪のバラの花があるんだけど、彼女は、ボクを懐けたんだと思う」

「そうかもね」とキツネは言った。「地球じゃ、どんなことだって起こるからね」

「えっ！地球での話じゃないよ」と王子さまは応えた。

キツネはとっても不思議がった。

「違う星の話なのかい？」

「うん」

「その星には、狩人はいるかい？」

「いないよ」

「いいねえ。じゃニワトリはいるかい？」

「ニワトリは、いないよ」

「そうか、そううまくはいかないもんだな」とキツネはため息をついた。

「オイラの毎日は、いつも同じことの繰り返しなんだ。オイラはニワトリを追いかけ、人間はオイラを追いかける。ニワトリはどれもこれもみんな同じに見えるし、人間だって誰もがみんな同じに見える。だから、オイラちょっとうんざりしているんだ」



「でも、キミがオイラを懐かせてくれたら、オイラの毎日は、光が溢れたみたいにキラキラになる。オイラは、キミの足音をしっかり聞き分けられるようになるだろう。他の足音なら、オイラは巣穴の中に隠れるけど、キミの足音だったら、ウキウキして巣穴から跳ねて出ていくよ。」

それから、ほら、あの向こうの黄金色の小麦畑が見えるかい？オイラはパンを食べないから、小麦ってどうでもいいものなんだ。だから、小麦畑を見ても、何にも感じない。それって、なんか切ないと思わないかい？でも、キミの髪の毛が黄金色でしょ。だから、黄金色の小麦畑は、オイラにとってとても想いのこもったものにかわるんだ、キミがオイラを懐かせてくれたら、黄金色の小麦畑を見て、オイラはキミのことを思い出すよ。そうやって、オイラは小麦に囲まれて、風の音に耳を傾けるようになると思うんだ」

キツネは静かに王子さまをじっと見つめた。

「お願いがあるんだ。オイラを懐かせておくれよ」

「うん、よろこん。」と王子さまは返事をした。「でも、あんまり時間がないんだ。友達を見つけて、たくさんのことを知らなきゃいけないんだ。そして知らせなきゃいけないんだ」

「自分の懐かせたものしか、わからないよ」とキツネは言った。「人は、暇がないから、何にもわからない。人間たちは物売りのところで、出来上がったものだけを買うだけなんだ。でも、友だちを売るやつなんて、どこにもいないから、人間には、友だちってものがない。友だちが欲しいなら、オイラを懐かせておくれよ」

「ボクは何をすればいいの？」と王子さまは言った。

「時間を犠牲にしなきゃいけない」とキツネは答えた。「まず、オイラからちよつと離れた場所にキミが座る。例えば、その草むらとかにね。オイラはキミを横目で見ているだけ。キミは何もしゃべらない。言葉はね、すれ違いの原因なんだ。そうすると、1日、1日、ちよつとずつそばに座ってもいいようになるんだ。わかるかい？」

次の日、王子さまはまたやってきた。

「昨日と同じ時間に、来た方がよかったのに」とキツネは言った。



「オイラはキミが午後の4時に来るなら、3時にはもうウキウキしてくる。それから時間がどんどん進むと、ますますウキウキしているオイラがいて、4時になる頃には、ただもう、ソワソワドキドキ。そうやって、オイラは、幸せを感じるんだ。でも、キミがでたらめな時間に来るなら、いつ心の準備をしてもいいんだか、オイラわからないだろ。だからオイラたちには、決まり事があるんだよ」

「決まり事って？」と王子さまは質問した。

「これも今では誰もが忘れちゃったことさ」とキツネはため息をついた。「1日を他の1日と、1時間を他の1時間と、まったく別のものにしてしまうものことなんだ。たとえば、オイラを追いかける狩人にも、決まり事があるんだ。狩人たちは、毎週木曜日は村の娘たちとダンスをするんだ。だから、木曜はオイラにとって、とても心地いい日なんだ。オイラはブドウ畑までゆっくりぶらぶら歩いて行けるからね。もし、狩人たちが曜日を決めずにダンスをしていたら、どの日もみんな同じようになって、オイラの心が休まる日がなくなってしまうだろ」

こんなふうには愛もない色々なことを話したり、様々な時間を過ごして、王子さまとキツネは懐いていった。そして、王子さまはそろそろ行かなきゃならなくなった。

「はあ、もう行ってしまふのかい。涙が出ちゃうね」とキツネは言った。

「君のせいだよ」と王子さまは言った。「ボク、つらいことは大嫌いなんだ。でも、君は、ボクに懐けて欲しかったんでしょ」

「そうだよ」とキツネは答えた。

「でも、今にも泣きそうじゃないか君は」

「そうだね」とキツネは言った。

「じゃあ、君には何のいいこともないじゃないか、ただつらいだけ」

「いいこともあったよ。黄金色の小麦畑が素敵なものになったし」とキツネは言った。

それからこう続けた。

「キミが前に行ったバラの庭に行ってみなよ。今のキミには、キミのバラの花が、世界にたった一つだけの花ってことがわかるはずだから。そのあと、オイラのところへ戻ってきたら、秘密をひとつ教えてあげるよ。」

王子さまは、キツネに言われたとおり、バラの庭に行った。

「君たちは、ボクのバラの花とは、ちっとも似ていない。君たちは、まだボクにとって何でもない存在のバラなんだ」と王子さまは、たくさんのバラ達に言った。「誰も君たちを懐けてないし、君たちも誰も懐けさせていない。君たちは、出会った頃のボクとキツネと同じで、他の男の子10万人と他のキツネ10万匹と、何のかわりもない」

するとたくさんのバラ達は、ぼつが悪そうにうつむいていた。

「君たちはきれいだけど、空っぽなんだ」と王子さまは言葉を続けた。「君たちのために死ぬことなんてボクにはできない。もちろん、ボクのバラの花だって、通りすがった人から見れば、君たちと同じバラなんだと思う。でも、ボクにとっては、君たち全部よりも、大切なバラの花なんだ。だって、ボクが水をやったのは、あのバラの花だけなんだから。だって、ボクがガラスの覆いをかぶせて寒さから守ってやったのは、あのバラの花だけなんだから。だって、ボクがついたてで冷たい風から守ってやったのは、あのバラの花だけなんだから。だって、僕が毛虫を追い払ってやったのもあのバラの花だけなんだから。（2、3匹、チョウチョにするために残したけど）だって、僕が、文句とか、自慢とか、たまに沈黙だって、一緒に過ごしたのは、あのバラの花だけなんだから。だって、僕のバラの花なんだから……」王子さまは、泣いていた。

それから、王子さまは約束通りキツネのところへ戻った。

「お別れだね」と王子さまが言うと

「これでお別れさ」とキツネが言った。

「オイラの秘密だけど、すっごく簡単なことなんだ」

「いいかい、本当に大切なことは、目には見えない。ってことさ」

「本当に大切なことは、目には見えない」

「本当に大切なことは、目には見えない」

と王子さまは、忘れないように繰り返した。

「バラのために失くしたキミの時間が、キミのバラをかけがえのないものにしたんだよ」

「バラのために失くしたボクの時間……」

「バラのために失くしたボクの時間……」

と王子さまは、忘れないように繰り返した。

「いま人間は、本質的なことを、忘れてしまったのさ」とキツネは言った。

「でも、キミは忘れてはいけない。キミは、自分の懐けたものに対して責任があるんだよ。何かを返さなくちゃいけない責任があるんだ。キミは、キミのバラに、その責任があるんだ」

「ボクは、ボクのバラに責任がある」

「ボクは、ボクのバラに責任がある」

と王子さまはもう一度、繰り返した。その言葉の意味の重さを忘れないように。

「こんにちは」と王子さまが言うと、

「こんにちは」とポイント切り換え師が言った。

「あなたは、ここで何をしているの？」と王子さまが質問すると

「お客を1000人ずつに分けてるんだ」とポイント切り換え師が答えた。

「機関車にお客が乗ってて、そいつをお前は右だ、お前は左だって、分けていくんだよ」

すると、機関車が、ピカッ、ビュン、ゴロゴロゴロと雷みたいに走ってきた。ポイント切り換え師のいる建物がガタガタと揺れた。

「みんな、ずいぶん急いでいるんだね」

「彼らは何かを探しに行くの？」

「それは、動かしてる本人だって、わからないよ」とポイント切り換え師は答えた。

すると、今度は逆向きに、ピカッ、ビュン、ゴロゴロゴロ。

「もう戻ってきたの？」と王子さまが聞くと

「違う機関車だよ。彼らは別の場所から来て別の場所に向かうのさ」

「自分のいるところが気にいらないの？」

「人間は、いつだって自分のいる場所が、気に入らないんだ」

すると、またまた、ピカッ、ビュン、ゴロゴロゴロ。

「さっきの機関車を追いかけてるの？」と王子さまは聞いた。

「誰も追いかけてなんかいないよ。たまたまさ」とポイント切り換え師は答えた。

「彼らは車両の中で寝てるか、退屈そうにあくびをしている。子供たちだけが、窓ガラスに鼻をおしつけて、周りの景色を眺めているんだ」

「子供たちだけが、自分の探し物がわかってるんだね」と王子さまは言った。

「ただのパッチワークの人形に話しかけながら時間を過ごして、その人形が大切なものになっていく。だからそれを取り上げたら、泣いちゃうんだ」

「まったく、うらやましいかぎりだよ」とポイント切り換え師は言った。

「こんにちは」と王子さまが言うと、

「こんにちは」と物売りがいった。

物売りはクスリを売っていた。そのクスリは、のどのカラカラを抑えるようにできていて、1週間に一粒で、もう水を飲みたいって思わなくなるほどの効き目だった。

「どうして、そんなクスリを売くの？」と王子さまは質問した。

「無駄な時間を省けるからだ」と物売りは言った。「権威ある博士が数えたんだけど、1週間に53分も無駄が省ける」

「その53分をどうするの？」

「したいことをするんだ」

王子さまは考える。「僕、53分も自由になるんなら、ゆっくりと泉に歩いて行きたいな…」



僕の中のエンジンの中で何かが壊れておかしくなって、もうどうしようもなくなって、そうして砂漠に迷いこんでから、8日目を経とうとしていた。僕は、王子さまから薬売りの話を聞きながら、最後に残っていたわずかな水を飲み干した。

「そうなんだね…そういうことなんだね…」と僕は王子さまに心ない返事をした。「キミの話は、とても興味深い話だと思うけど、まだエンジンが直ってないし、もう飲む水もない。僕も、ゆっくりと泉の方へ歩いて行けると、うれしいんだけど…」

「友達のキツネがね…」と王子さまが言ったけど、

「いいかい、もうキツネの話なんかをしてる場合じゃないんだ」

「どうして？」

「水がもうないんだ。のどがカラカラになって、乾ききってもうすぐ死んじゃうんだよ！僕たちは！」

王子さまは、僕の言ったことを理解できていないようで、こう返してきた。

「友達になるってとてもいいことなんだよ、死んじゃったとしてもね。ボク、キツネと友達になれてすごくうれしくて、うれしくて…いいことなんだ」

僕は考えていた。王子さまは、僕たちの置かれている状況がまったく理解できていないんだ。空腹も、渇きも、感じていないんだ。ちょっとお日さまが当たってれば、王子さまにとっては、それで十分なんだ。

王子さまは僕を見つめて、こう言った。

「ボクだって、のどはカラカラさ。一緒に井戸を探そう…」

僕は、だるそうに体を動かした。井戸を探すなんて、ばかばかしいと思ったからだ。こんな砂漠のど真ん中に井戸なんてあるはずがない。常識的に考えればない。そう思っていたはずなのに、なぜか僕たちは歩きだしたんだ。あるはずのない井戸を探しに。絶望の向こう側にある何かにすぎるようにね。

僕たちはずっと、無言で歩いて行く。たくさんの砂丘を越えた。そして、日が暮れて、星が輝き始めた。僕は、意識を朦朧とさせながら、星を眺めた。のどが渇いて、意識が朦朧としていて、いつにもなく星が瞬き輝いていた。僕の頭の中には王子さまの言葉たちがぐるぐると廻っていた。

「じゃあ、キミも乾いているのかい？」と僕は王子さまに聞いた。

でも、聞いたことには答えず、王子さまはこう言った。

「水は、心にもとてもいいんだよ……」

僕は、どういう意味なのかわからなかったので何も答えられなかった…たぶん聞かない方がいいんだとわかっていたから。

突然、王子さまは座り込んでしまった。僕も王子さまのそばに腰を下ろした。砂漠の静寂の中で、王子さまはこう言った。

「星が美しく輝いているのは、そこに花があるからなんだね」

僕は「そうだね」と返事をして、金色の月明りに照らされた、静かな砂丘を眺めていた。

「砂漠は、美しいね」と王子さまは言葉をつづけた。

まさに、その通りだった。僕はいつでも、砂漠が恋しかった。何も見えない。何も聞こえない砂漠が。それでも、何かが、しんとする中にキラキラと輝いている何か…を感じていたから。

王子さまは言った。「砂漠が美しいのは、どこかに井戸を隠してるからなんだ…きっと」

僕は、ドキっとした。ふいに、なぜ、砂が輝いてるのか、その謎が解けたと思ったんだ。僕が小さな男の子だったころ、古いお城に住んでいた。言い伝えでは、そのお城のどこかには宝物が隠されているということだった。もちろん、誰一人として、それを見つけていないし、きっと、探す人さえもいなかったんだらう。でも、その言い伝えのおかげで、その城はまるごと、魔法にかかったように魅力的だったんだ。その城に、隠された秘密がある。どこか奥底に……。

「そうなんだね。やっと謎が解けたよ」と僕は王子さまに言った。「あのお城とか、あの星とか、あの砂漠が気になるのは、そうなんだ、何かを美しくするものは、目には見えないんだね」

「わかってくれて、うれしいよ」と王子さまは僕に言った。「君も、ボクのキツネと同じことを言ってるよ」

王子さまが静かに眠りに付くと、僕は王子さまを抱きかかえて、また歩き始めた。星の輝く、砂漠の歌う美しい夜だった。もう僕は、胸がいっぱいだった。なんだか、とても壊れやすい宝物を、運んでいるみたいだった。きっと、こんなに壊れやすいものは、地球上のどこにも存在しないだろう、とさえ思えた。僕は、金色の月明かりのもと、じっと王子さまを見つめた。王子さまの青白いおでこ、閉じた目、風に揺れる金色の髪。ここで見ているのは、ただの器に過ぎないんだ。本当に大切なものは、目には見えないのだから……

何も聞こえなかったけど、眠っている王子さまの唇が少し動いて何かを言おうとして、微笑んでいた。その時、僕は続けてこう考えていた。僕が王子さまに、こんなに惹かれるのは、王子さまがバラの花に真っ直ぐな気持ちで向かい合っているからなんだ。バラの花の姿が、王子さまの中で、ランプの炎みたく、キラキラしているからなんだ」その時、これこそ、世界中でもっとも壊れやすいものなんだということに気がついた。この想いを、しっかり守らなくちゃいけない。風がびゅんと吹けば、それだけで消えてしまうから…

そうして、そんなふう歩いてくうちに、僕は井戸を見つけた。それは新しい命が生まれるような夜明けのことだった。

王子さまは言った。「人間は、速い機関車に夢中になっているようだけど、まったく自分の探し物はわかってないんだ。人間は、ただそわそわして、同じところをぐるぐる廻ってるだけなんだ」

「そんなことしなくたっていいのにね…」

僕たちの見つけた井戸は、砂漠の井戸らしい姿をしていなかった。砂漠の井戸というのは、簡単な穴が空いてるだけだが、見つけた井戸は、村の井戸のように滑車、桶、ロープがみんなそろっていた。でも、周りに村なんてどこにも見あたらない。僕は、夢か幻かと思った。



王子さまは笑いながら、ロープを手にとり、滑車を回した。するとクルクルと音がした。風に吹かれた風見鳥みたいな音だった。

「聞こえるよね。僕らのおかげで、この井戸が目覚めて、うたを歌っているんだよ」

王子さまには、その滑車はとても重そうだったので「貸して」と言って代わった。

僕は、水の入った桶をゆっくりと井戸の淵まで引っ張り上げて、倒れないよう、しっかりと置いた。僕の耳では、滑車がうたい続けていていた。そして桶の水面に映った太陽がゆらゆらと踊っていた。

「飲ませて欲しいな」と王子さまが言った。

その時、僕はわかったんだ。王子さまの探していた物が…。

僕は、王子さまの口元まで、桶を持ち上げてあげた。王子さまは、目を閉じて水を飲んだ。その瞬間、僕の心が高鳴るように躍った。その水は、ふつうの水とは、全く別のものだった。この水は、星空の下を歩いて、滑車の歌があって、僕が腕をふりしぼったからこそ、ここにあるんだ。この水は、心を潤わせる。僕がかつて小さな男の子だったころ、クリスマスツリーがきらきらしていて、夜にはミサの音楽があって、みんながニコニコしてたからこそ、僕のもらった、あのクリスマスプレゼントは、あんなふうに、キラキラ輝いていたんだ。

王子さまが言った。「人間は、五千本ものバラをひとつの庭で育てている。でも、探し物は見つからないんだ」

「そうだね、見つからない」と僕はうなずく。

「それなのに、探し物は、一本のバラとか、ちょっとの水とかの中に見つかったりするんだ」

「そうだね」と僕はうなずく。

「でも、目に見えないことを心で探さなくちゃいけない」

僕は水を飲んで深呼吸をする。砂漠は、夜明けを迎え、セピア色になっていた。僕のなかでセピア色になったから。僕はもう無理をしなくてもいいんだね…。

「ねえ、描いてよ」と王子さまがポツリと言った。もう一度、僕の傍に座った。

「何を？描けばいいんだい」

「ヒツジの口輪。僕には、バラの花に責任があるんだ」

僕はポケットから、描いた絵を取り出した。王子さまはそれを見ると、笑いながら、こう言った。

「君のバオバブ、ちょっとキャベツっぽいな」

バオバブはいい出来だと思っていたのに。

「君のキツネの耳、ちょっとツノっぽい。長すぎるよ」

王子さまは、けらけらと笑った。

「そんなこと言わないでよ。僕は、中身の見えないボアと中身の見えるボアしか、今まで絵を描いたことがなかったんだから」

「ううん、それでいいの。子供たちは、わかってくれるから」

そんなわけで、僕は、鉛筆で口輪を描いた。それで、王子さまにあげただけど、そのとき、なぜだか心が苦しくなった。

「ねえ、僕に何を隠しているんだい？」

でも、王子さまはそれに答えず、こう言った。

「ボク、地球に落ちこちて明日で1年が経つんだ」

そのあと、しばらく黙ってから、

「この近くに落ちこちたんだよ」と言って、顔を真っ赤にした。

そのとき、また、なぜだかわからないけど、僕は急に悲しい気持ちになった。そして、僕は聞いてみたんだ。

「じゃあ、1週間前、僕と君が出会ったあの朝、キミがあんな風に、人の住むところの遥か彼方、一人っきりで歩いていたのは、偶然じゃなかったんだね。キミは、落ちこちたところに、戻ろうとしているんだね？」

王子さまは、何も言わない。僕は、ためらいつつも言葉を続けた。

「もしかして、1年たったら…」

王子さまは、質問には答えなかったけど、でも、黙っているということは、そうだと知っているのと同じってことだから、だから。

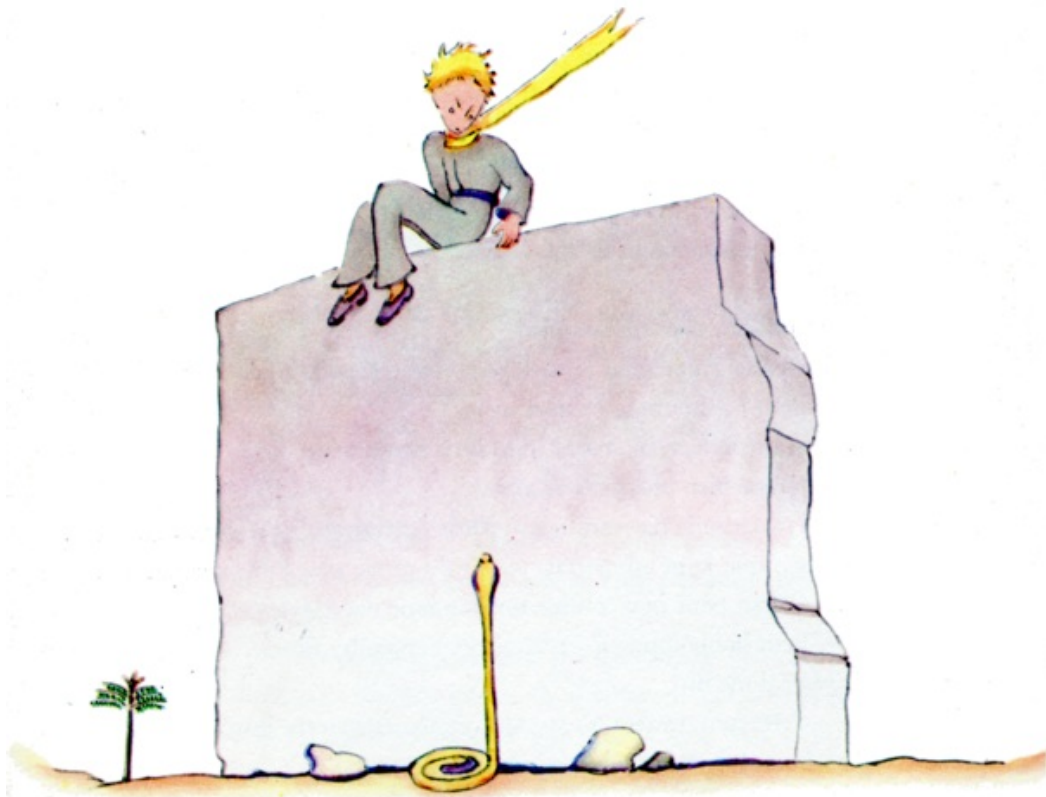
「ねえ」と僕は言った。「大丈夫？」

それでも、王子さまは答えなかった。

「君は、もう、やるべきことをやらなくちゃいけない。自分の居るべきところへやるべきことをしに帰らなくちゃいけない。ボクは、ここで待っているから、明日の夜、帰ってきてよ…」

どうしても、僕は落ち着けなかった。キツネのことを思い出していた。誰であっても、なづけられたら、ちょっと泣いてしまうものなのかもしれない。

井戸の傍に、壊れた古い石の壁があった。次の日の夕方、僕がやるべきことをやって戻ってくると、遠くの方に、王子さまがその壁の上に座って、足をぶらんとさせているのが見えた。王子さまの話し声も聞こえてきた。



「じゃあ、君は覚えてないの？」と王子さまは言った。

「ここは、違うよ」王子さまの言葉に、誰かが返事をしているみたいだった。

「一年前の今日、居た場所はここじゃない。違うんだ、ここじゃないんだ」

僕は、壁の方へ歩いて行った。けれど、相手は見えないし、相手の声も聞こえない。それでも、王子さまは、また言葉を返していた。

「砂漠についたボクの足跡が、どこから始まっているかどうかくらいわかるでしょ。君は待つだけでいいの。ボクは、今日の夜、そこにいるから」

僕は、壁から20メートルの所まで来たけど、まだ何も見えない。

王子さまは、しばらく黙りこんだあと、もう一度言った。

「君の毒は、大丈夫だよな？じわじわ苦しまなくてもいいんだよな？」

僕は心が苦しくなって、立ち止まった。けれど、どうしてなのか、やっぱりわからなかった。

「とにかく、もう行ってよ」と王子さまは言った。「僕は下りたいんだ！」

そのとき、僕は気になって、壁の下のあたりを覗き込んでみた。僕は、飛び上がった。なんと、そこにいたのは、王子さまの方へ鎌首を上げている黄色いヘビが1匹。人間を30秒で殺してしまうほど猛毒のやつだ。僕はピストルを撃とうと、懸命にポケットの中を探りながら、かけ足で近づいた。だけど、僕のたてた音に気づいて、ヘビは砂の中へ、しゅるしゅるとひっこんでしまった。それからヘビは、急ぐようでもなく、石の間をカシャカシャと軽い音をたてながら、すり

ぬけていった。

僕は、なんとか壁まで行って、なんとか王子さまを受け止めた。僕の王子さまの顔が、雪のように青白い。

「一体どういうことなの！さっき、キミ、ヘビと話していたよね」

僕は、王子さまのつけているマフラーをほどいてやった。こめかみを水でしめらせ、水を飲ませてあげた。とにかく、もう僕は何も聞けなかった。王子さまは、思いつめた様子で、僕のことをじっと見て、僕の首に手を回して抱きついた。王子さまの心臓のドキドキが直接伝わってくる。鉄砲に撃たれて死んでゆく鳥みたいに、弱々しい鼓動が。

「うれしいよ、君は、自分に足りないものを見つけたんだね。これでもう君の居場所に帰っていきけるね」

「どうして、わかるんだい？」

僕は、ちょうどそのことを知らせに来るところだった。考えていたよりも、やるべきことがうまくいったんだって。

王子さまは、僕の聞いた事には答えず、こう続けた。

「ボクもね、今日、ボクの家へ帰るんだ。」

それから、寂しそうに、

「ここから遥かにずっと遠いところに、遥かにずっと難しいのだけれど……」

僕は、ひしひしと感じた。何かとんでもないことが王子さまの身に起ころうとしている。僕は、王子さまをぎゅっと抱きしめた。だけど、僕には王子さまが僕の腕をするっと抜け出て、穴に落ちてしまうような気がした。僕には、それを受け止める力も受け入れる力もなかった。

王子さまは、遠い目で、何かをちゃんと見ていた。

「ボクには君の描いてくれたヒツジがあるし、ヒツジのためのハコもあるし、口輪もある。」

そう言って、王子さまは、寂しそうに微笑んだ。

僕は、じっとしていた。王子さまの体が、ちょっとずつ軽くなっていくのを感じた。

「キミ、本当は怖かったんだね。怖いのは、当たり前なのに」

でも、王子さまは、そっと笑って、

「夜になれば、遥かにもっと怖くなる」

もう手遅れになってしまったんだって思うと、僕はまた、ゾツとした。僕は、この笑い声が、もう聞けないなんて、どうしても、受け入れることができなかった。この笑い声が、僕にとって、砂漠の中の井戸のようなものだったんだ。

「僕はもっと、キミの笑い声を聞いていたいよ」

でも、王子さまは言った。

「夜がくれば、1年になるんだ。ボクの星が、ちょうど、この真上にくるんだ」

「王子さま、これは悪い夢なんだろう？ヘビのことも、会えたことも、星のことも…」

でも、王子さまは、僕の聞いたことに答えず、こう言った。

「本当に大切なことっていうのは、見えないんだよ」

「そうだね…」

「それは花も同じ。君がどこかの星にある花を好きになったら、夜、空を見るのが楽しくなる。どの星にもみんな、花が咲いているんだよ」

「そうだね」

「それは水も同じ。君がボクに飲ませてくれた水は、まるで音楽みたいだった。滑車とロープのおかげだね。そうでしょ。」

「そうだね…」

「君は、夜になると、星空を眺める。ボクの星は小さすぎるから、どれだか教えてあげられない

んだけど、かえって、その方がいいんだ。ボクの星っていうのは、君にとっては、あのたくさんの星の中の一つ。だから、どんな星だって、君は星を見るのが好きになるだろ。みんなみんな、君の友達になる。そうして、ボクは君に、贈り物をするんだよ」

王子さまは、けらけらと笑った。

「ねえ、王子さま。僕は、その笑い声が好きなんだ」

「うん、それが僕の贈り物だよ。水と同じだよ」

「どういうこと？」

「人間には、みんなそれぞれにとっての星の意味があるんだ。旅人には、星は方角を定めるものだし。他の人にとっては、ほんの小さな明かりにすぎない。学者にとっては、研究対象だし、仕事人間にとっては、お金のもと。でも、そういう星だけど、どの星もみんな、沈黙して何にも言わない。だから、君にも、誰とも違う星があるんだよ」

「どういうこと？」

「夜、星空を眺めた時、そのどれかの星にボクが住んでいる。だから、そのどれかの星でボクが笑っているんだ。だから君にとっては、まるで星みんなが笑っているみたいになる。君には、笑ってくれる星空があるってことなんだよ」

王子さまは、けらけらと笑った。

「だから、君の心が癒えたら（人の心はいつかは癒えるものだから）、君は、ボクと出会えてよかったって思うよ。君は、いつでもボクの友達だよ。君は、ボクと一緒に笑いたくてたまらない。だから、君は時々、窓を開けて星を見る、楽しくなりたくてね。だから、君の友達はみんなびっくりするだろうね、君が星空を見ながら笑っているんだもん。そうしたら、君はこんな風に思うだろう。『そうだ、星空は、いつだって僕を笑顔にしてくれる。』だから、君の周りの人たちは、君がおかしくなったと思ってしまうかもしれない。だからボクは君に、とつてもたちの悪いいたずらをしたってわけさ」

そして、けらけらと王子さまは笑った。

「けらけら笑う、小さな鈴を、たくさんあげたみたいなもんだね」

けらけらと笑った。それからまた、ちゃんとした声で。

「だから今夜は来ないで欲しいんだ」

「キミを、一人にはできないよ」

「ボク、ぼろぼろに見えるし、ちょっと死にそうに見えるけど、そういうものなんだ。見に来ないでよ。そんなことしなくていいから...」

「キミを、一人にはしたくないよ」

でも、王子さまは心配そうに言った。

「あのね、ヘビがいるんだよ。君に噛みつくといけないから。ヘビっていうのは、とても凶暴で、君に噛みつくかもしれないよ」

「それでもキミを、一人にはさせないよ」

でも、ふっと、王子さまは落ち着いて、

「そっか、毒は、二度目に噛みつくときには、もうなくなっているんだっけ」

あの夜、僕は、王子さまがまた歩き始めたことに気がつかなかった。王子さまは、音もなく抜け出していた。



僕が何とか追いつくと、王子さまは、わき目もふらず、早足で歩いていた。王子さまはただ、こう言った。

「来てしまったんだね」

それから、王子さまは僕の手をとって、また悩みだした。

「だめだよ。君が傷つくだけだよ。ボクは死んだみたいに見えるけど、本当はそうじゃない」

僕は、何も言わなかった。

「わかるよね。速すぎるんだ。ボクは、この体を持っていけないんだ。重たすぎるんだ」

僕は、何も言わなかった。

「でもそれは、脱ぎ捨てた、抜け殻と同じ。抜け殻なら、切なくはないはずだよ」

僕は、何も言えなかった。

王子さまは、ちょっと沈んだ。でもまた、声をふりしぼった。

「素敵なことだよ。ボクも、星を眺めるよ。星はみんな、錆びた滑車のついた井戸なんだ。星はみんな、ボクに、潤いを注いでくれるんだから…」

僕は、何も言わないことにした。

「とても楽しいことだよ。君には5億の鈴があつて、ボクには5億の水くみ場があるんだから」

そして王子さまも、それ以上、何も言わなかった。だって、泣いていたんだから……

「ここだよ。もう一人で、歩かせて」

そう言って、王子さまは座り込んだ。



王子さまは、こう続けた。

「わかるよね。ボクは、ボクの花に責任があるんだ。ボクの花はとてめか弱くて、とても無邪気なんだ。周りから身を守るのは、四つのトゲしかないんだ」

僕も座り込んだ。もう立ってはいられなかったから。

王子さまは言った。

「これで、最期にしよう…」

王子さまはちょっとためらって、立ち上がった。1歩だけ、前に進む。僕は動けなかった。

何かが、黄色く光っただけだった。くるぶしの近く。王子さまの動きが、一瞬だけ止まった。声もしなかった。王子さまは、ゆっくりと倒れた。木が倒れるようだった。砂のせいか音さえもしなかった。



この話は、もう6年も前のことです。僕は、王子さまのことを、これまで誰にも話さなかった。いや話せなかったと言った方が正しいかもしれない。飛行機仲間たちは、生還した僕の顔を見て、無事に帰ってきたことをとても喜んでくれた。僕は、王子さまとの別れがとても悲しかった。けど、飛行機仲間達には、こう言った。「もう、砂漠はこりごりだよ」と…

僕の心も、少しは癒えてきている。完全にとりわけじゃないけど。でも、僕は、わかっている。王子さまは、自分の星に帰ったんだということを。あの不思議な夜が明け、明るくなってから王子さまの体を探しても、どこにも見あたらなかった…。

体は、そんなに重荷ではなかったんだろう。他の何かが重荷だったんだと思う。

そして、僕は毎夜、星に耳を傾けるのが好きになった。王子さまの言った通り、5億の鈴と同じなんだ。ほんとに。

そしてある日、とんでもないことを忘れていたことに気付いてしまったんだ。僕はヒツジの口輪を王子さまに描いてあげたんだけど、僕はそれに、皮のひもを描き足すのを忘れていたんだ。だからどうやっても、ヒツジをつないでおくことはできない。

なので、僕は、毎夜、考えこんでしまう。王子さまの星では、どういう事態になっているんだろうか？もしかして、ヒツジがバラの花を食べてやしないかと。

こうも考える。「きっと王子さまは、自分の愛するバラの花を一晩中ガラスの覆いの中に隠して、ヒツジから目を離さないはずだ」そう想像しながらいると、僕は幸せになる。そして、星がみんな、そっと笑ってくれている。

また、こうも考える。「人間というのは、1度や2度、気が緩んでしまう。それが危ないんだ。王子さまが夜、ガラスの覆いを忘れてしまったり、ヒツジが夜のうちに、こっそり抜け出したりしないか…」そう想像すると、楽しく聞こえていた鈴は、すっかり悲しい音に変わってしまう。

同じ鈴の音なのに楽しい音、悲しい音と違ったふうに聞こえる。とても不思議なこと。

王子さまが大好きな君たちにも、そして僕にとっても、宇宙ってものが、どこか知らないところで、僕たちの知らないヒツジが、一輪のバラを食べるか、食べないかってだけで、全く別のものになってしまうんだ。

星空を見てごらん。そして心で想像してごらん。

「あのヒツジは、あの花を食べたのかな？」

そうしたら、君たちは、全く別のものが見えるはずだ。

そして、大人たちは、誰一人わからない。それがとても大切なんだってことを！

これは、僕にとって、世界で一番美しく、そして一番、悲しい景色です。さっきのページのもの、同じ景色なのですが、みんなによく見てもらいたいから、もう一度描きます。王子さまが、地上に降り立った場所で。そして旅立ったのもこの場所からです。



しっかり、この景色を覚えておいてください。何もない寂しい砂漠の景色と一旦は覚えていただいても構いません。いつか君たちが、何らかの理由で乾ききった砂漠を旅するとき、この場所がちゃんとわかるように覚えていてください。そして、もし、この場所を通ることがあったら、お願いですから、立ち止まって、星空の下で、ちょっと待っていて欲しいんです。もし、そのとき、一人の男の子が君たちのところへ来て、黄金色の髪と笑顔をキラキラとさせながら、こちらから質問しても何も答えてくれなかったら、それが誰だか、わかるはずですよ。

そんなことがあったら、どうか僕へ、手紙を書いてください。王子さまが帰ってきたよ。と…。

アントワーヌ・ド・サン・テグジュペリと内藤濯

作者アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは1944年7月31日、第二次世界大戦の最中、飛行機で基地をたったまま、消息を絶ちました。撃墜され、かつて大空を飛びまわった彼は海の中で眠りについた。そのとき、携えられ一緒に飛び立ったのが星の王子さまの仮綴じ本でした。

サン＝テグジュペリは操縦士でありながら、生涯にいくつかの文学作品を残しています。そのなかでも、"Le Petit Prince" は、日本では内藤濯氏の「星の王子さま」の邦題でよく知られている作品は、世界中の人々から愛されるたぐいまれな本となっています。この翻訳では、内藤濯氏が創案した「星の王子さま」というタイトルをあえて使います。なぜなら、私たち日本人にとっては、「星の王子さま」は、「星の王子さま」として、すでに根付いているからです。日本ではLe Petit Princeは星の王子さまとして歩み続けてきたのですから。

翻訳にあたって

この「星の王子さま」は、丹羽直柔が「伝えたいことを伝える」という概念で読む文章として翻訳および編集しています。その意味では、内藤氏に翻訳の方針とは別の概念です、果たしてその方針がうまくいったかどうか、私に判断することはできません。読者のみなさんのご判断を待つばかりです。

翻訳者の経験から、子供のころ読んだときはさっぱり理解できなかった「星の王子さま」は歳を重ね内容が成長する物語なのである。と確信を持っています。

この翻訳では、できるだけ難解な言葉を使わないようにしました。しかし、その言葉がやさしいからと言って、内容を簡単にしたということではありません。私は、むずかしい内容だからむずかしい言葉でなければならない、というふうには思いません。特に、この "Le Petit Prince" がそうであるように、たとえやさしい言葉で書かれていても、むずかしいことということは存在します。ですから、私はたとえこの作品の内容が大人向けであっても、言葉の上では、伝わる言葉で訳そうと思います。そのため平易な言葉を選びつつ、読みやすい文章になるよう心がけました。ときに意味より、リズムを優先した部分もあります。

そして、この翻訳では、自分が作品について語りすぎていることをお伝えします。翻訳者に限らず、人はわかっていることをすべて語ろうとします。"Le Petit Prince" であれば、その作品についてわかっていることを、その作品について読み込んだことを、翻訳にすべて出したくなっていくのです。しかし、そのなかには作品に書いてないことも含まれています。それをすべて書けば、また元の作品とは変わってくるでしょう。そういったことは、翻訳ではなく研究書や別の文章として書くべきものであり、翻訳に書き込むものではありません。しかし、あえて書き込んでいる部分が多々あることを断っておきます。

参考文献・サイト・謝辞

内藤濯 [訳] (1966) 『星の王子さま [改版]』岩波書店

—— [訳] (2000) 『星の王子さま——オリジナル版』岩波書店

小島俊明 [訳] (2005) 『新訳 星の王子さま』中央公論新社

三野博史 [訳] (2005) 『星の王子さま』論創社

倉橋由美子 [訳] (2005) 『新訳 星の王子さま』宝島社

山崎庸一郎 [訳] (2005) 『小さな王子さま』みすず書房

池澤夏樹 [訳] (2005) 『星の王子さま [ハードカバー版]』集英社

川上勉、甘樂美登利 [訳] (2005) 『プチ・フランス 新訳 星の王子さま』グラフ社

藤田尊潮 [訳] (2005) 『小さな王子 新訳『星の王子さま』』八坂書房

辛酸なめ子 [訳] (2005) 『「新」訳 星の王子さま』コアマガジン

石井洋二郎 [訳] (2005) 『星の王子さま』筑摩書房

稲垣直樹 [訳] (2006) 『星の王子さま』平凡社

河野万里子 [訳] (2006) 『星の王子さま』新潮社

谷川かおる [訳] (2006) 『星の王子さま』ポプラ社

野崎歓 [訳] (2006) 『小さな王子』光文社

(以上、刊行年月日順)

稲垣直樹 (1992) 『サン＝テグジュペリ 人と思想』清水書院

—— (1993) 『サドから『星の王子さま』へ フランス小説と日本人』丸善

片木智年 (2005) 『星の王子さま☆学』慶應義塾大学出版会

加藤晴久 (2006) 『自分で訳す「星の王子さま」』三修社

小島俊明 (2000) 『改訂版 おとなのための星の王子さま——サン＝テックスを読みまし

たか』近代文芸社

内藤濯 (1971) 『未知の人への返書』中央公論社

—— (1971) 『星の王子とわたし』文藝春秋

—— (1976) 『落穂拾いの記』岩波書店

内藤初穂 (1984) 「童心の日記——序に代えて」『星の王子 パリ日記』(内藤濯 [著])

グラフ社

—— (2003) 「『星の王子さま』備忘録その一」『図書 2003.12』岩波書店

—— (2006) 『星の王子の影とかたちと』筑摩書房

藤田尊潮 (2005) 『『星の王子さま』を読む』八坂書房

水本弘文 (2002) 『「星の王子さま」の见えない世界』大学教育出版

三野博司 (2005) 『『星の王子さま』の謎』論創社

柳沢淑枝 (2000) 『こころで読む「星の王子さま」』成甲書房

山崎庸一郎（1984）『星の王子さまの秘密』彌生書房

―― [編]（1995）『星の王子さまのはるかな旅』求龍堂

――（2000）『『星の王子さま』のひと』新潮社

RenardBleu（1999-2006）『「星の王子さま」総覧』 Available online at
www.lepetitprince.net (accessed 2005-2006)

翻訳の底本：Antoine de Saint-Exupery (1943) "Le Petit Prince"

上記の翻訳底本は、著作権が失効しています。なお、挿絵はレイナル&ヒッチコック社刊の初版第1刷（1943）より複製しました。

翻訳者：丹羽直柔